



第1回里山広葉樹林利活用推進会議



里山広葉樹林の 新たな価値創造と 利活用を通じた再生 に向けて

林野庁国産広葉樹利活用推進チーム

CONTENTS



0 1

里山広葉樹の
特徴とその変遷



0 2

広葉樹の需要
動向



0 3

里山広葉樹林
の新たな価値
創造と利活用
を通じた再生
に向けて

CONTENTS



0 1

里山広葉樹の
特徴とその変遷



0 2

広葉樹の需要
動向

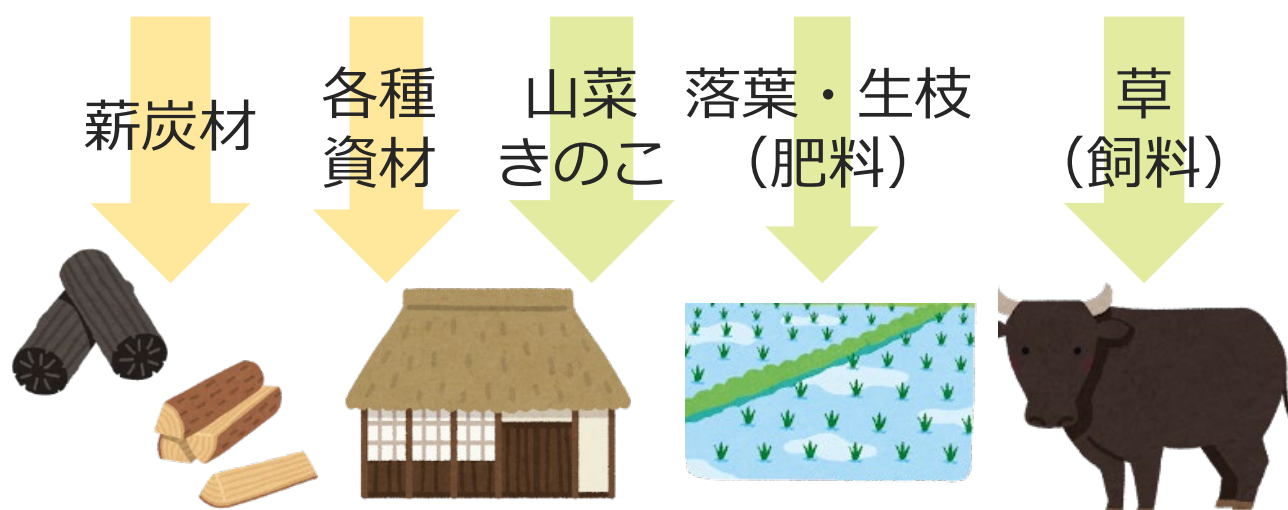


0 3

里山広葉樹林
の新たな価値
創造と利活用
を通じた再生
に向けて

里山とは

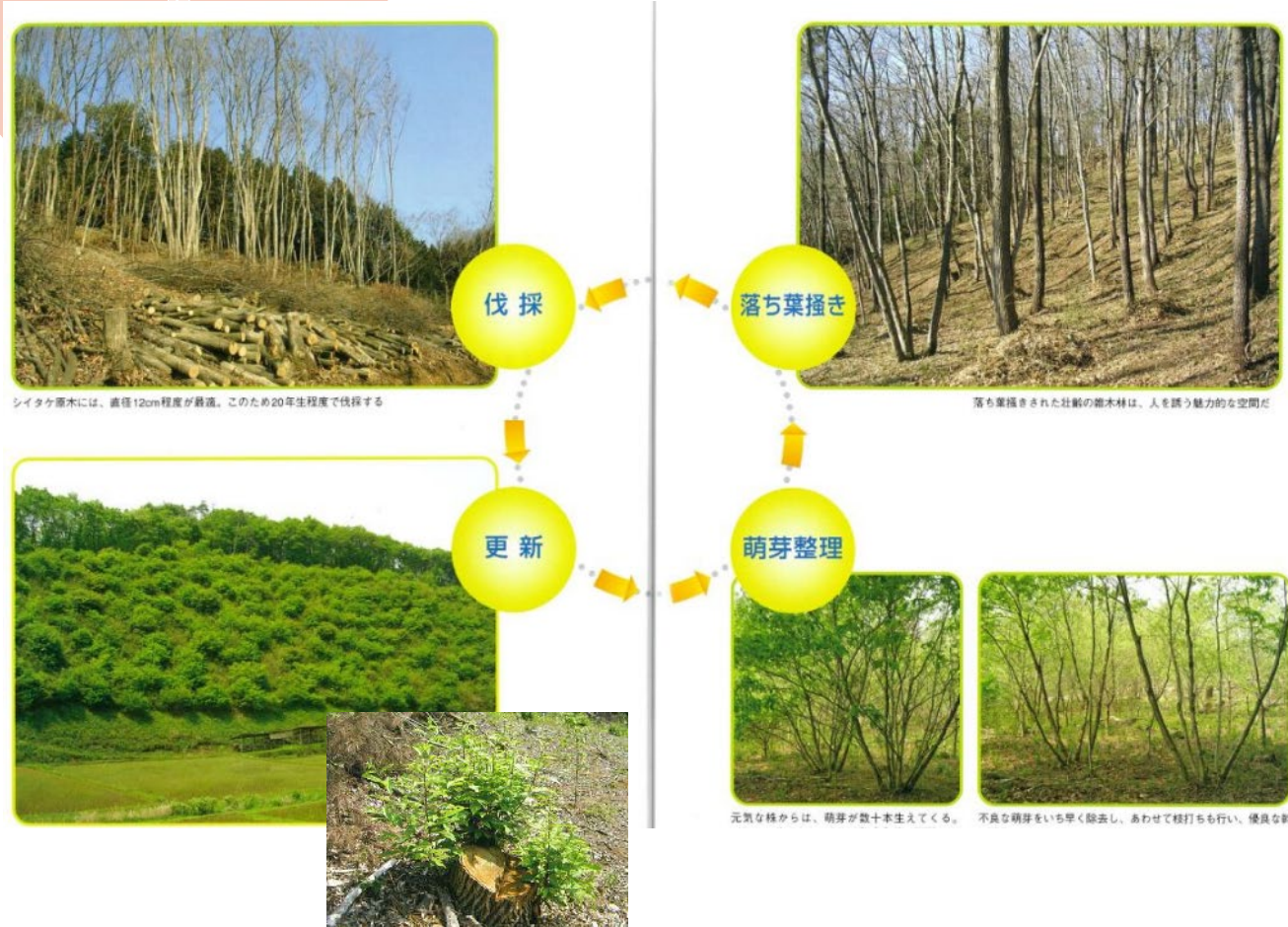
- ・ 里山は、エネルギー革命以前、生活必需品である燃料等の資源を調達するため、地域住民の日々の暮らし・生業に不可欠なものとして密接に結びつき、利用・維持管理されてきた森林を中心とする場。
- ・ 薪や炭などの燃料、農具や住居などの生活に必要な資材、山菜等の食料、農業用の落葉などを供給するため、広葉樹林(主に薪炭林)(以下「里山林」)のほか、原野や竹林等により構成。



里山林の樹種と利用

- ・ 燃料材として優れ、伐採した切り株から芽が出て（萌芽）再生しやすい、コナラ、ミズナラ、クヌギ、カシ等の広葉樹林が中心。
- ・ コナラやクヌギは、しいたけの栽培にも適しており、「ほだ木」としても利用。
- ・ 伐採→萌芽による再生→成長→伐採のサイクルにより利用。
- ・ 伐採する木以外にも落ち葉や春先の若枝を定期的にご利用。

かつての里山林の施業のイメージ



里山林の環境

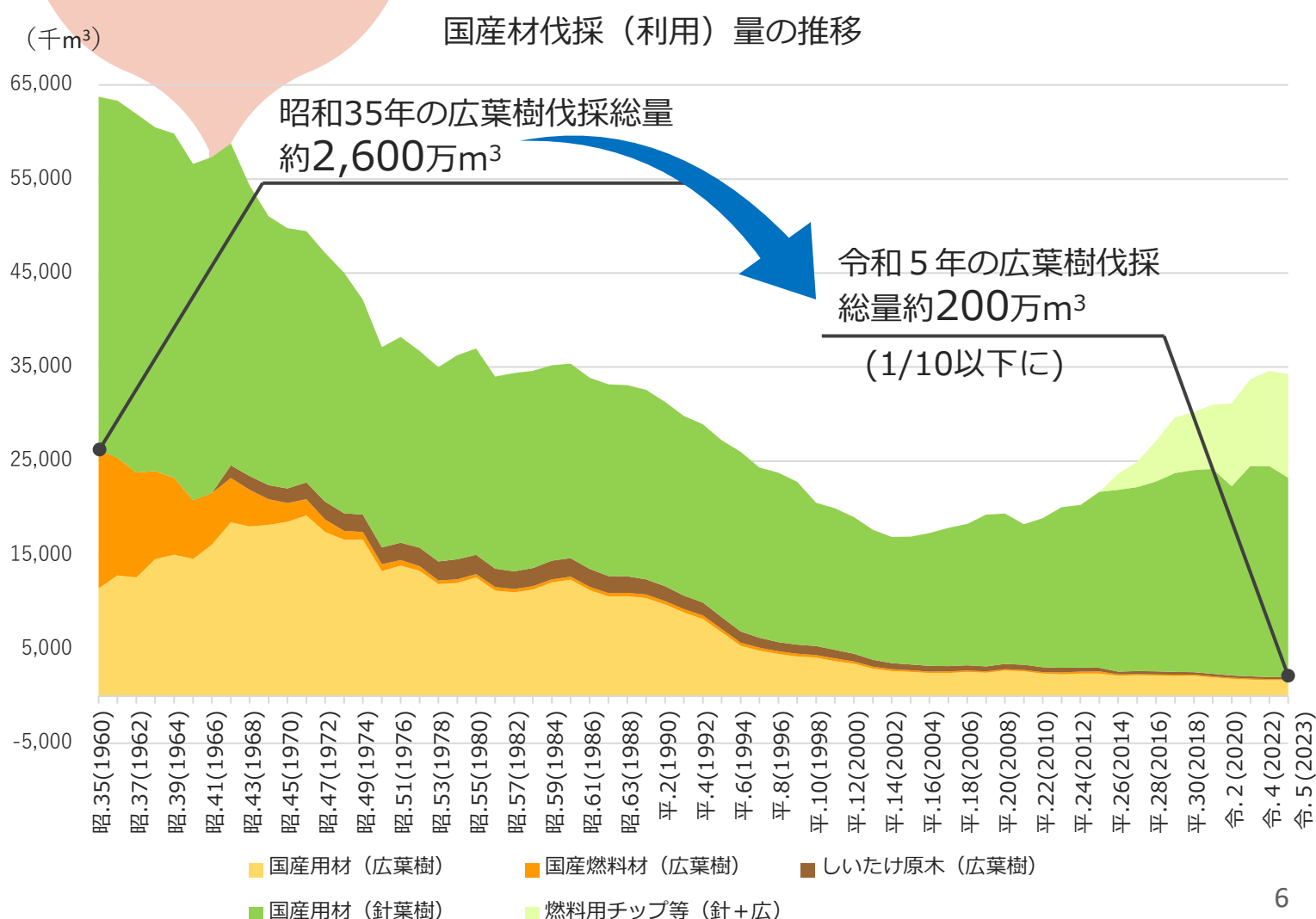
- ・ 里山林の大部分を占めるコナラやクヌギなどの薪炭林は、長くて 20 ～ 30 年程度の間隔で「伐採」と「萌芽による更新」を繰り返すため、かつては比較的直径が細く、樹高も低い株立ちした樹木からなる森林であった。
- ・ 定期的に伐採されるため、林の中は比較的明るく保たれる。その結果、里山林には成長の早い樹木が多く、明るいところを好む昆虫や草本が多く生育。



生活利用の縮小と広葉樹伐採の変遷

- ・昭和30年代頃からの燃料革命、化学肥料使用の拡大等により、地域住民による里山林の生活利用・生業利用は縮小。
- ・昭和30年に20百万m³あった燃料利用は昭和45年には1/10に。現在の燃料材（薪炭材）利用は1/200の10万m³程度。
- ・乾しいたけの生産量の減少に伴い、しいたけ原木の伐採量が減少。昭和54年の2百万m³をピークに現在は1/10以下の20万m³。
- ・燃料材、しいたけ原木、用材※含めた広葉樹の伐採総量は減少傾向が続き、現在は昭和35年の1/10以下の約2百万m³。

※ 主に製材・合板・製紙用の木材



現在の里山林

- ・ 利用されなくなった里山林は成長により高齡化・大径化し、樹冠のうっ閉、遷移により常緑樹が増える、ササや低木が生い茂り藪化することなどにより、暗い環境に。



① 大径化しつつある里山林



② 長期間放置され、林床に低木が生い茂った里山林



③ 長期間放置され、林床にアズマネザサや低木が密生した里山林

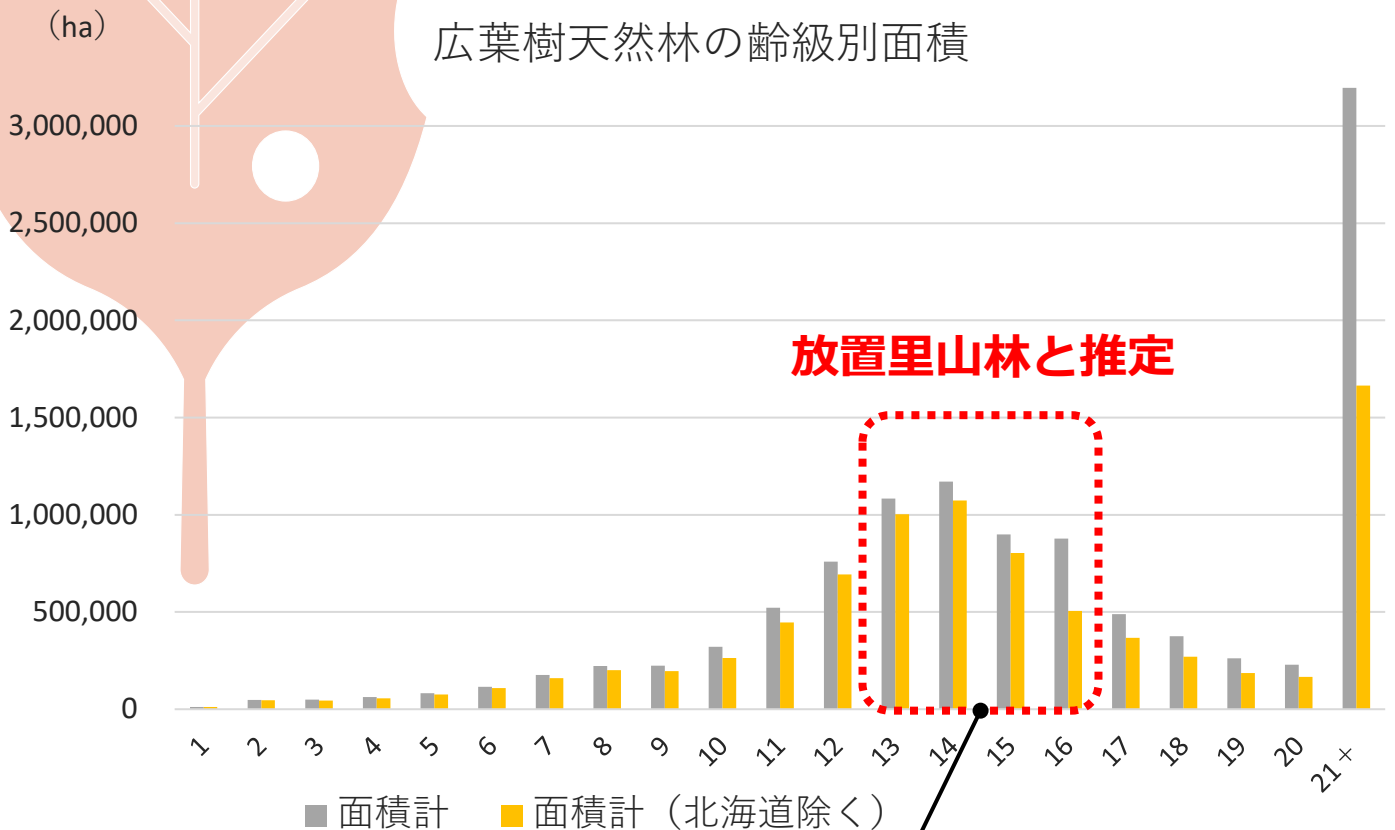


④ 放置によりアズマネザサが
繁茂した林
刈払い等の管理を行った林

放置里山林面積の推計

- ・林野庁「森林資源の現況（令和4年3月31日現在）」から、薪炭林が長くて20～30年程度の間隔で伐採と更新を繰り返していたという前提で、放置里山林を燃料革命中の昭和35（1960）年以降伐採されていない※広葉樹天然林の面積と推定すると、300万～400万ha程度となる。

※（昭和36（1961）年時点で1年生～20年生、令和4（2021）年時点で61年生～80年生（13齢級～16齢級））



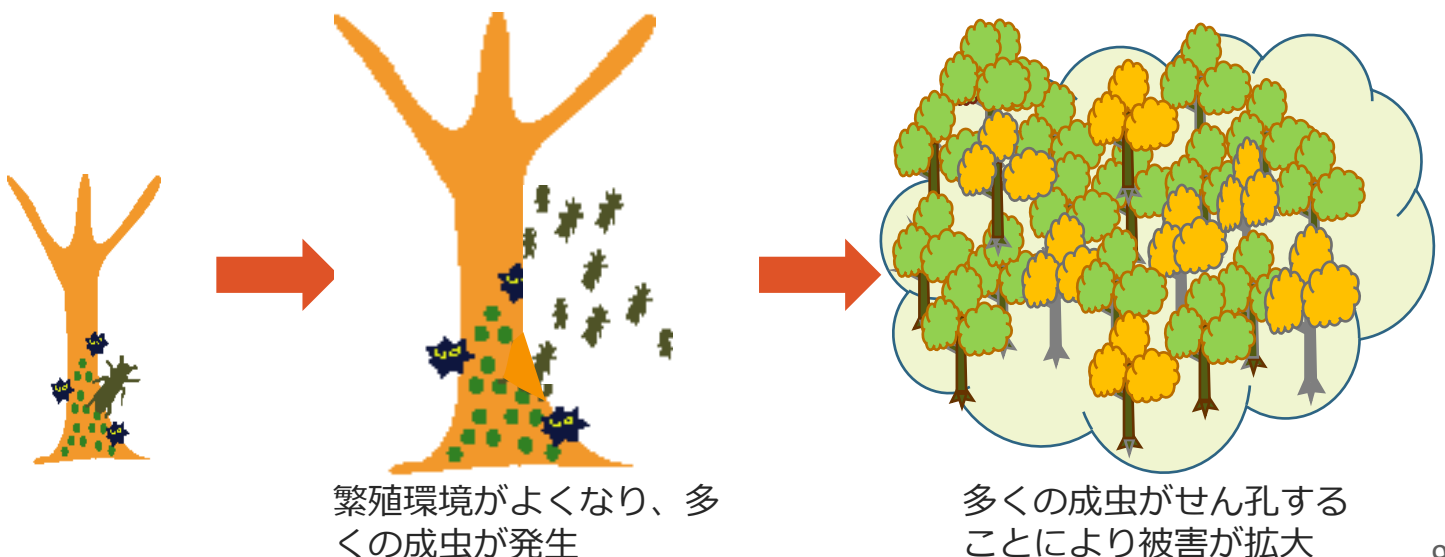
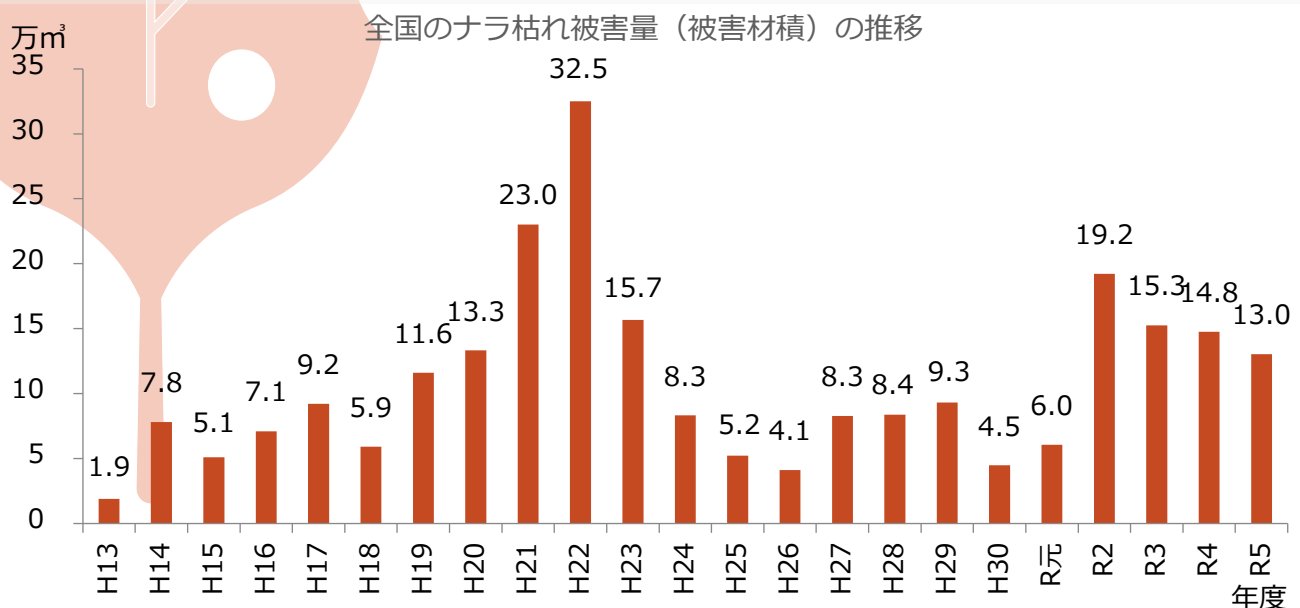
放置里山林と推定

4,030,641ha

昭和35（1960）年以降伐採されていない広葉樹天然林
（61年生以上～80年生（13～16齢級））

ナラ枯れ被害の拡大

- ・ カシノナガキクイムシが媒介するナラ枯れは、1980年代後半から、東北や北陸で被害が目立つようになり、全国に拡大。ナラ枯れ被害量は、平成22年度をピークに減少し、10万 m^3 未滿で推移してきたが、令和2年度には約19.2万 m^3 に再び急増。令和5年度には、北海道で初めて被害が発生するなど44都道府県で被害が発生。
- ・ ナラ枯れ被害が拡大した要因の一つに、1950年代の燃料革命以降里山林が伐採されず放置されたことにより、カシノナガキクイムシの繁殖に適した大径木が増えたためと考えられている。



ナラ枯れ被害の影響

- ・ 大径化したナラ材資源を枯損により喪失。
- ・ 集団的にナラが枯れた場所では、ギャップの面積が大きくなるため、ギャップ内に低木性の樹種しかない場合や、ササが繁茂している場合は、いつまでたってもギャップがふさがらず、森林の公益的機能（風致、防災など）が低下する可能性。
- ・ その他、倒木や落枝による人身被害の危険が危惧されているほか、ナラ枯れ被害木の周辺では「カエンタケ」と呼ばれる毒きのこの発生が報告されている。



① ナラ枯れ被害の状況



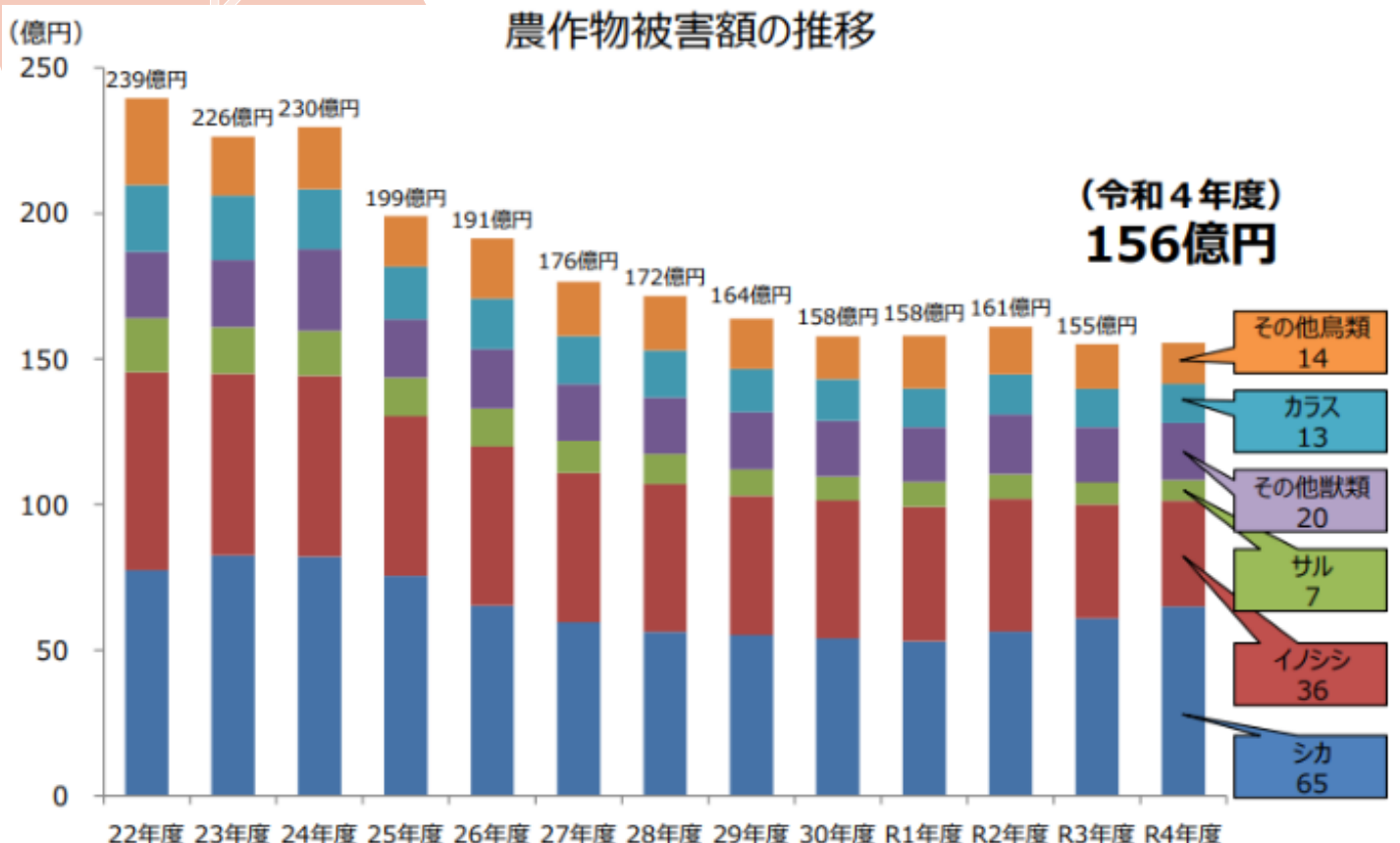
② ナラ枯れ被害の状況



③ カエンタケ

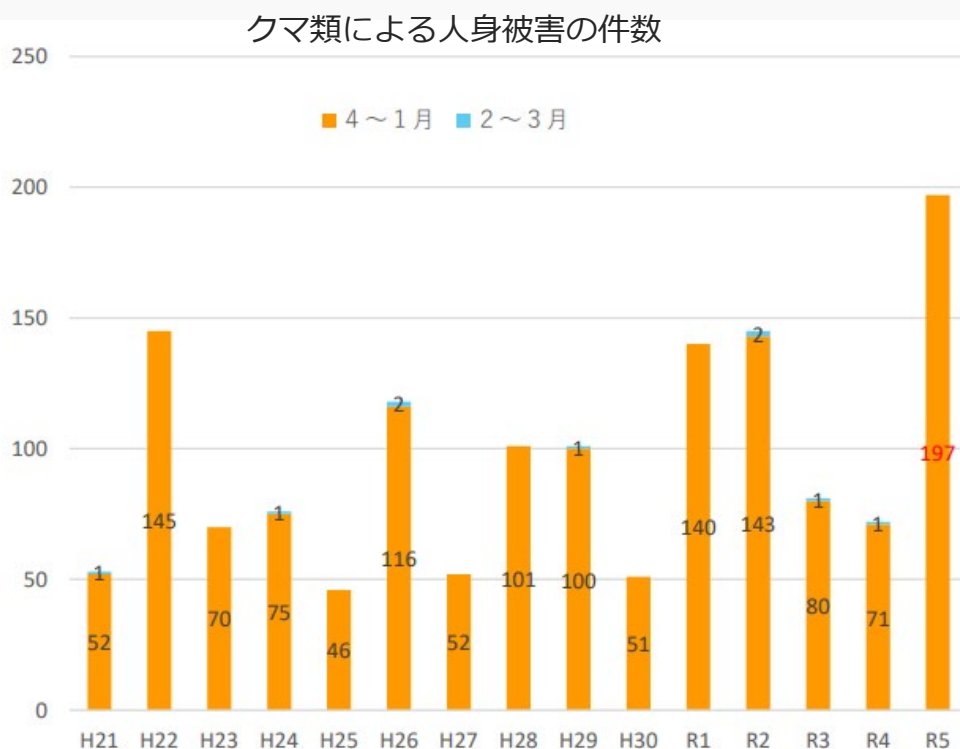
野生動物との軋轢の増加～シカ・イノシシ等～

- ・農山村の過疎化、高齢化によって里山における人間活動が低下し、1980年代以降、サル、シカやイノシシ等の中大型哺乳類の分布が拡大。中大型哺乳類の増加・拡大は、自然植生への影響だけではなく農業被害等の人との軋轢を引き起こしている。
- ・シカやイノシシについては、狩猟者数の減少に伴う捕獲圧の低下に加え、燃料革命や産業構造の変化による集落周辺環境の変化や温暖化に伴う積雪量の減少等が増加の要因となっている可能性。



野生動物との軋轢の増加～クマ類～

- ・近年、クマ類による人身被害の件数が増加。クマ類の出没増加については、里山環境の変化も要因の一つと考えられている。
- ・林業や狩猟、里山利用など森林内における活動する人口の減少等によって、森林内で人に追われる機会が減少し、人への警戒心が薄れ、集落周辺での分布域の拡大が、容易に出没する要因のひとつとなっている。人口減少・高齢化による中山間地域での人間活動の低下、里山の利用の縮小、耕作放棄地の拡大、放任果樹の増加等により、人の生活圏周辺がツキノワグマの生息に適した環境に変化しつつある。
- ・樹木の大径木化はクマ類の食物環境や生息環境に影響を与える。例えば、クマ類が好むブナやミズナラは胸高直径が大きくなるほど、種子生産量も増加することが知られている。また、大径木はクマ類の冬眠穴としても利用される。このように、大径木の増加は、里山をクマ類にとっての好適な生息環境に変化させる。



出典：環境省（令和6年2月）「クマ類の生息状況、被害状況等について」

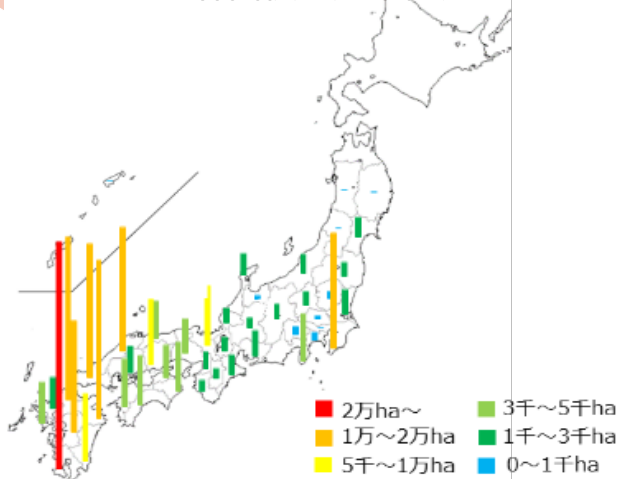
クマ類保護及び管理に関する検討会（令和6年2月）「クマ類による被害防止に向けた対策方針～クマとの軋轢の低減に向けた、人とクマのすみ分けの推進～」

環境省自然環境局（2021）「クマ類の出没対応マニュアルー改定版ー」

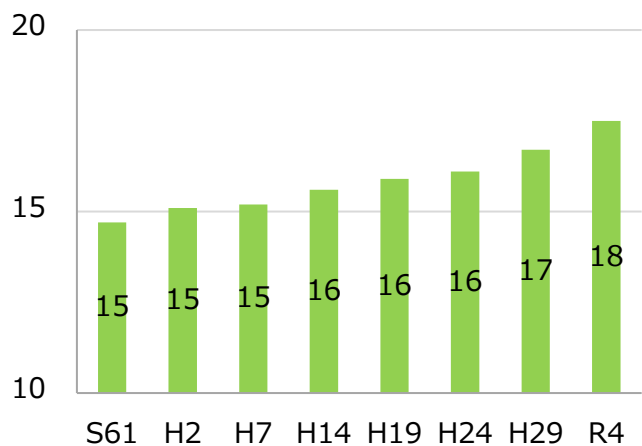
放置竹林について

- ・竹は従来、身近な資源として、日用雑貨、建築・造園用資材、工芸品、食品等様々な用途に利用。このような利用を通じて竹林は管理されてきたが、プラスチックなどの代替材の普及、安価な輸入たけのこの増加等により、国内の竹材やたけのこの生産は減退。このため、管理の行き届かない竹林が増加し 周辺に拡大。
- ・竹林は、九州・中国地方に多く分布。この10年間で8%程度増加して約18万ha、全森林の0.7%を占める。
- ・竹林はその特徴として、タケの地下茎が伸びることにより毎年拡がり続けて周囲の森林に侵入拡大し、樹木を枯死に至らしめたり、植生を衰退させ、公益的機能の低下、景観の悪化などが懸念されている。

竹林面積と分布状況



(万ha) 竹林面積の推移



CONTENTS



0 1

里山広葉樹の
特徴とその変遷



0 2

広葉樹の需要
動向



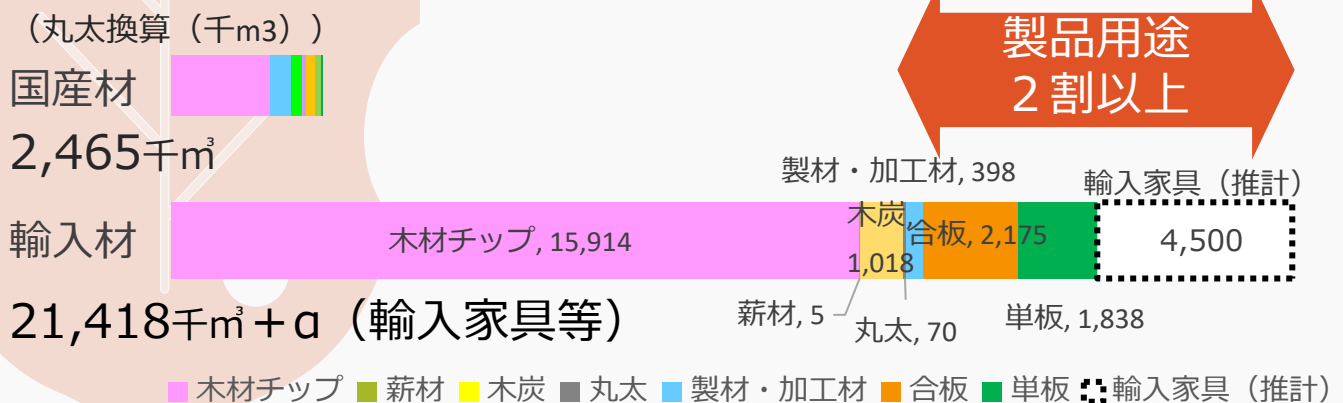
0 3

里山広葉樹林
の新たな価値
創造と利活用
を通じた再生
に向けて

我が国の広葉樹の需要（全体像）

● 広葉樹需要量（令和5(2023)年）

- ・広葉樹需要の総計（国産＋輸入）は少なくとも約2,400万m³で、国内の木材需要（約8,000万m³）の3割
- ・このうち国産材は約250万m³で、全体の1割程度
- ・輸入広葉樹の製品用途は2割以上



資料：財務省「貿易統計」より林野庁作成

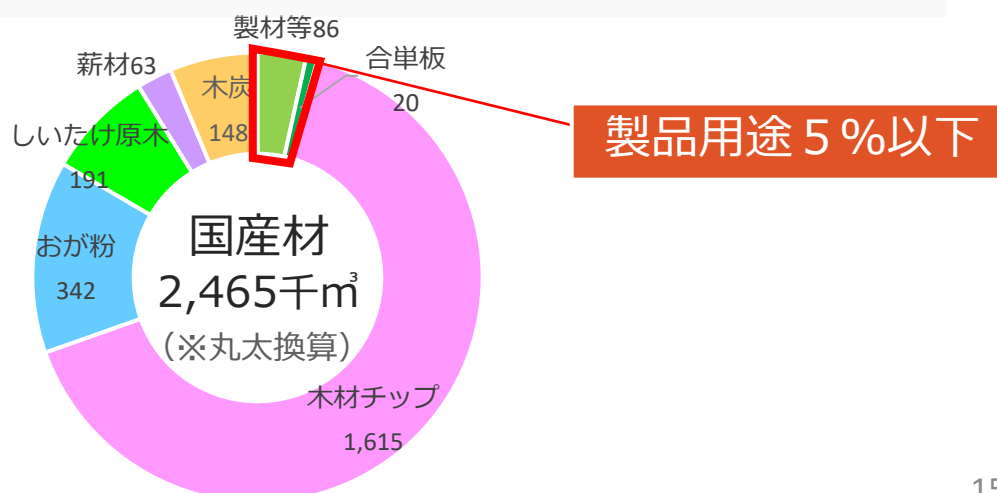
注1：輸入量は、「木材需給表」の丸太換算率を使用して算出

注2：貿易統計について「針葉樹以外のもの」を抜粋（ペレットは含まず）

注3：輸入家具量は、農林中金総研論文の換算率を使用した推計値（針葉樹を含む）

● 国産広葉樹の需要内訳（令和5(2023)年）

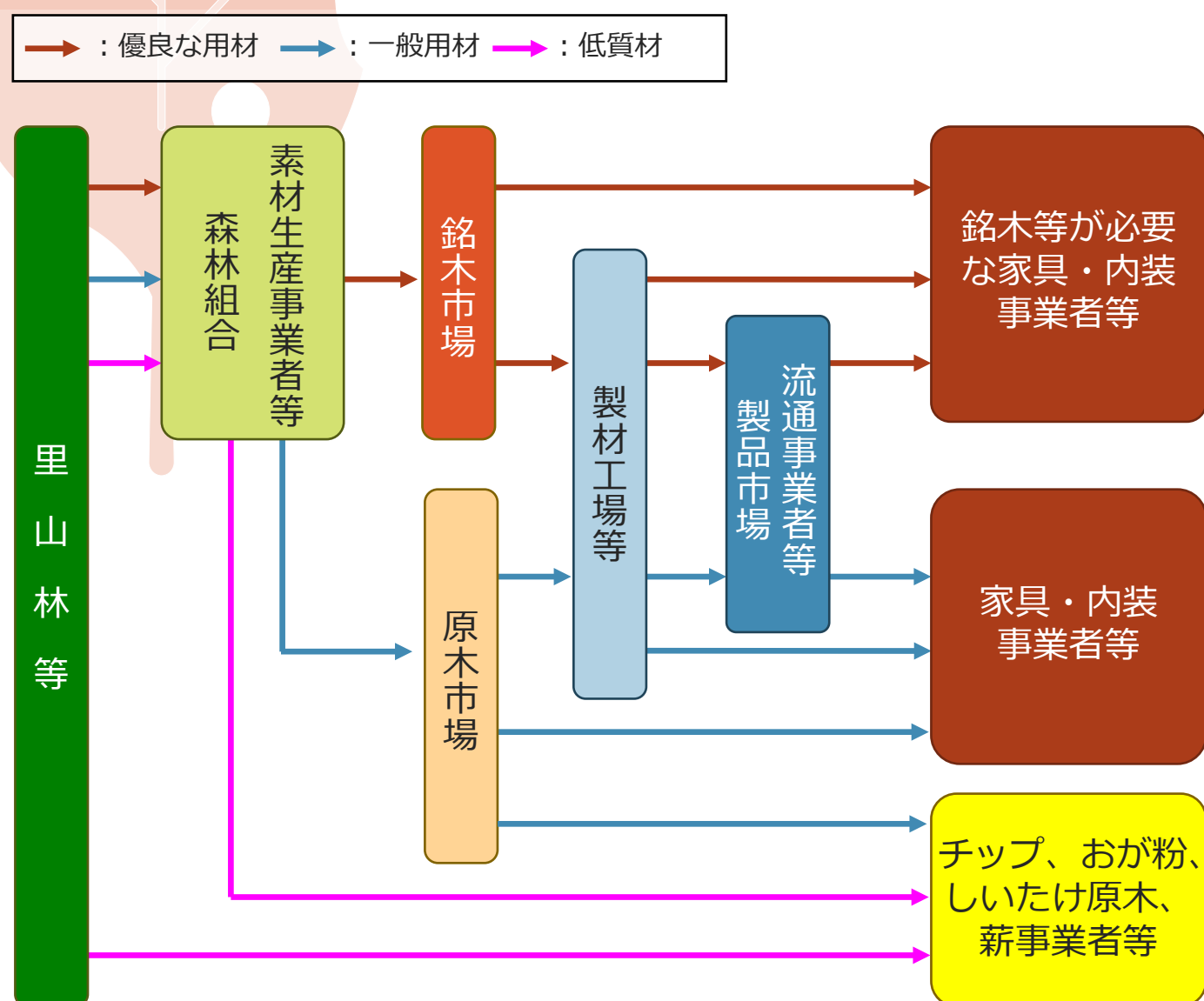
- ・国産広葉樹の製品用途は5%以下に留まっている
- ・きのこ用（おが粉・しいたけ原木）、薪炭など特用林産は、全体の3割を占めている
- ・需要の7割を占めているのは主に製紙用のチップ



資料：製材、合単板、木材チップ、しいたけ原木は農林水産省「令和5(2023)年木材統計調査」。おが粉、薪材、木炭は同「特用林産基礎資料」から算出。

国産広葉樹材の主な流通

- 一般用材以上の品質の広葉樹丸太は、原木市場を通じた流通が一般的
- なかでも銘木とされる優良な用材は、通常、特定の銘木市場（北海道、岩手、岐阜など）に出品
- 里山林等の広葉樹は、樹種、径級、材長などにより、家具・内装等の一般用材のほか、薪炭、きのこ生産資材、チップなど、様々な用途に利用

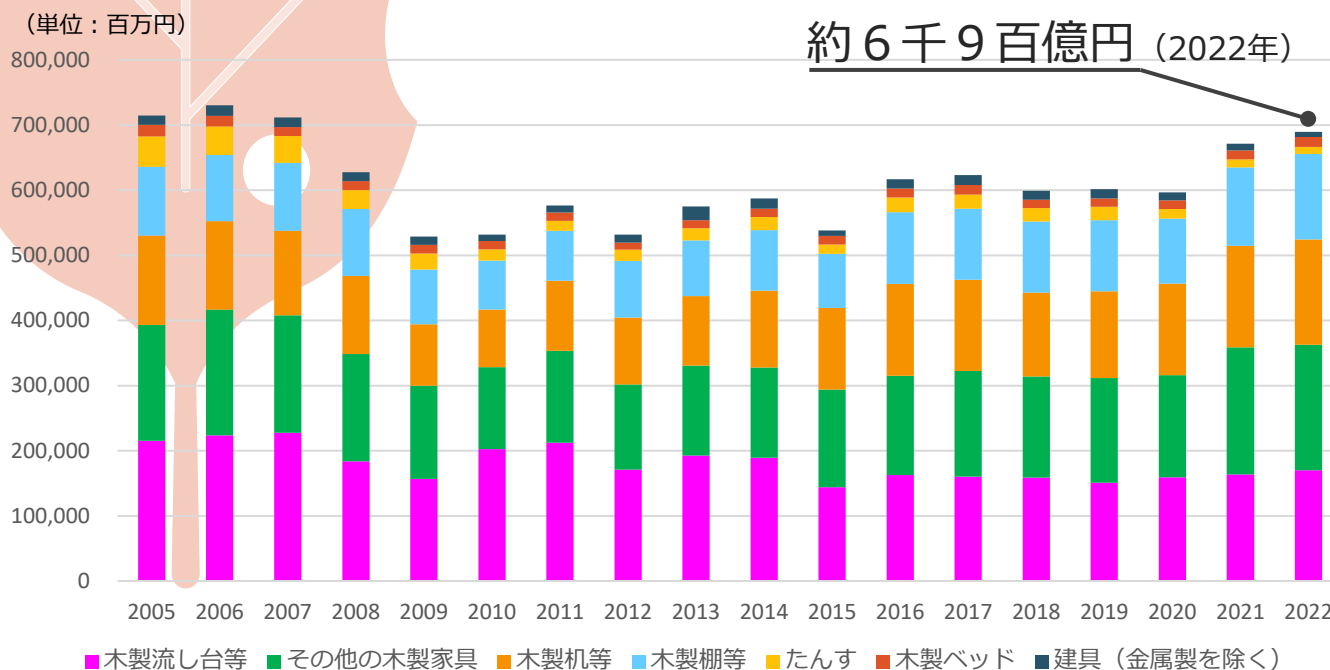


木製家具・床板製造業の動向

- 木製家具や床板製造業は、主に広葉樹材を加工・製造しており、広葉樹の需要先として重要な産業
- 産業規模（出荷額）は、合わせて約 8 千億円強であり、2010 年以降、若干上昇傾向
（参考）製材8,900億円、木材チップ1,500億円、合板5,000億円、集成材2,700億円
- 新設住宅着工戸数が減少傾向であるのに対して、木製家具産業、床板産業は比較的堅調

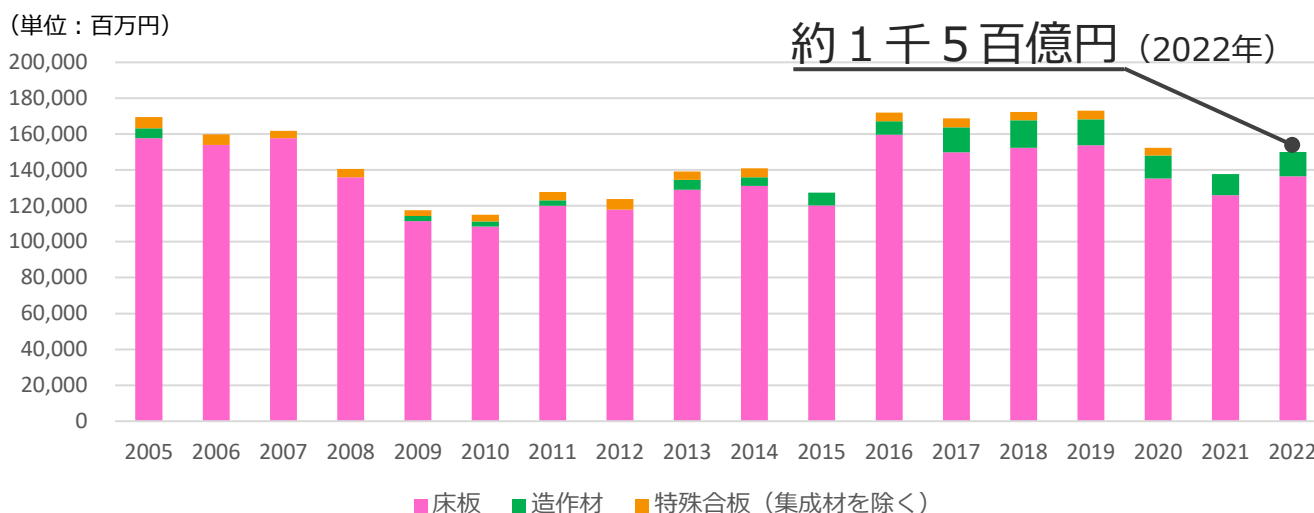
木製家具製造業生産出荷額

約 6 千 9 百億円（2022年）



床板製造業生産出荷額

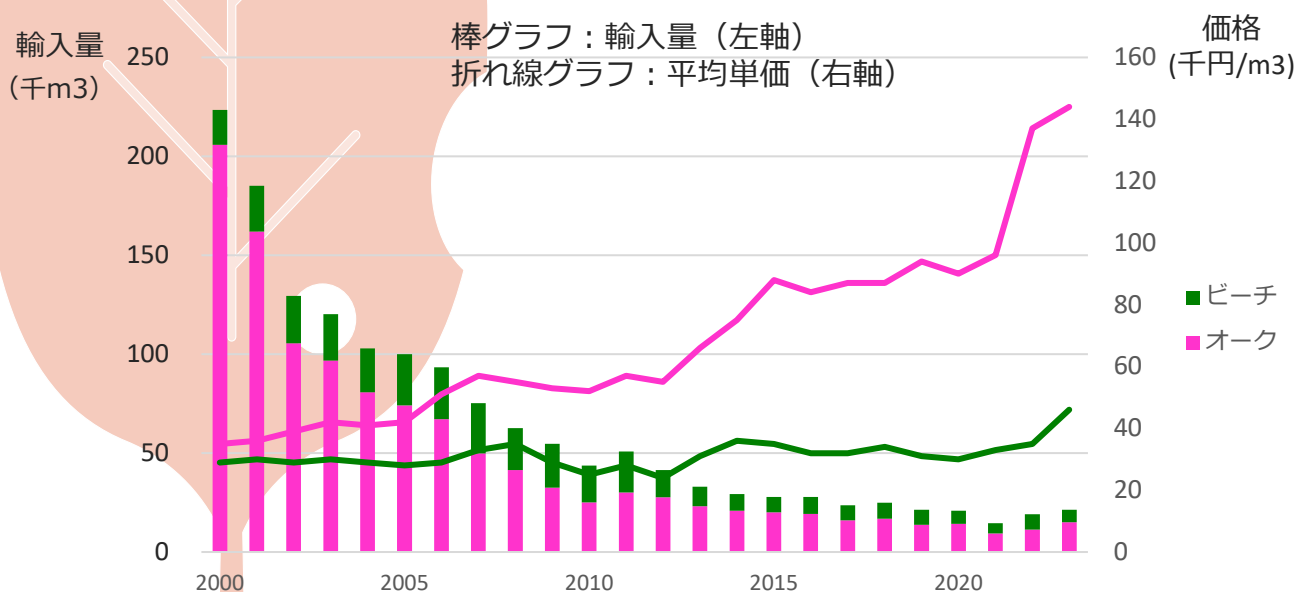
約 1 千 5 百億円（2022年）



家具・内装用広葉樹（主要樹種） の輸入動向

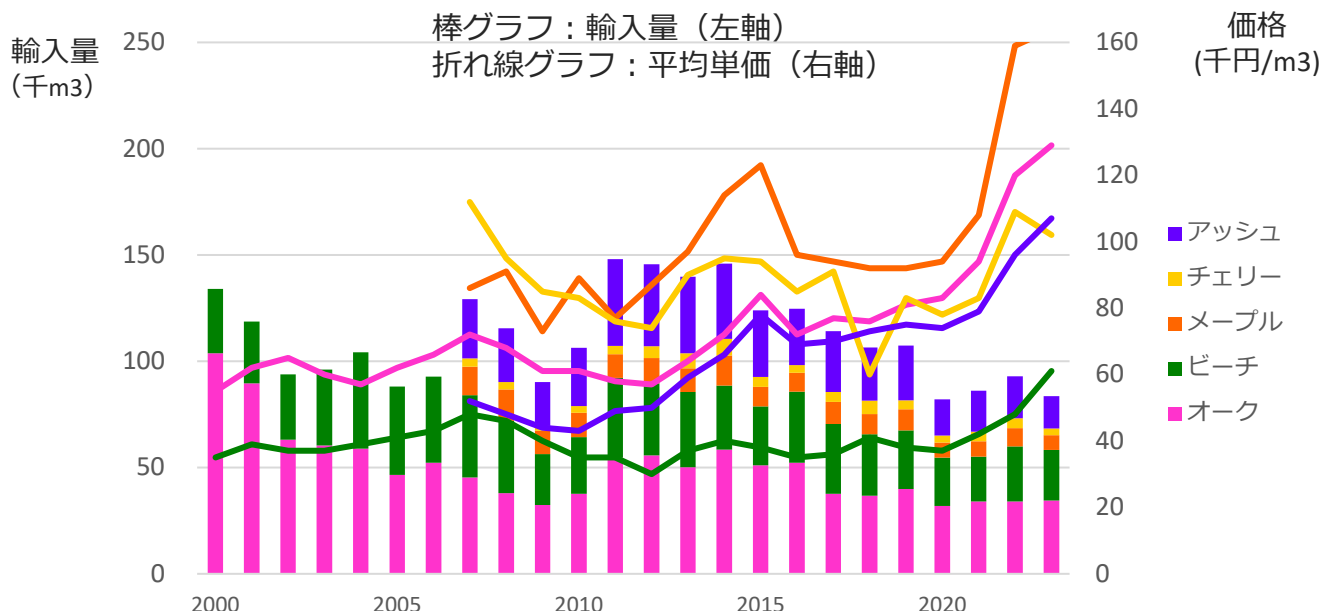
- ・オーク（なら類）など主要な輸入広葉樹について、丸太、製材品ともに価格が急上昇している状況
- ・また、輸入量も減少傾向であり、特に輸入丸太の減少が顕著

主要輸入広葉樹（丸太）の輸入量、平均単価



資料：財務省「貿易統計」より林野庁作成

主要輸入広葉樹（製材品※丸太換算）の輸入量、平均単価



※2007年に輸入の品目分類の変更があり、メープル・チェリー・アッシュが追加

資料：財務省「貿易統計」より林野庁作成

国産広葉樹への転換事例【旭川家具】

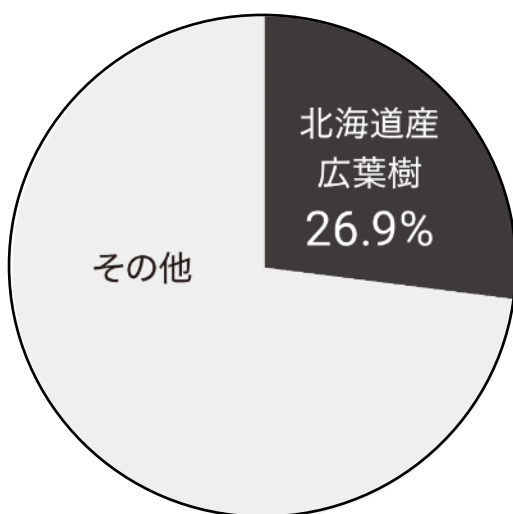
- 旭川家具では、北海道産の広葉樹材の活用を推進する「この木家具・北海道プロジェクト」を2014年からスタート
- 北海道産の広葉樹の使用比率を高めることで、木材輸送に係るエネルギーの削減や、森林の持続的な循環利用に取り組んでいる。
- 実施主体は旭川家具工業協同組合（40社）

● 道産広葉樹材の利用動向

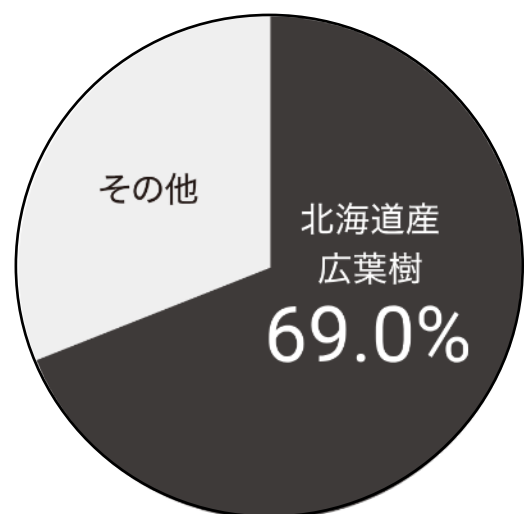
- 2014年には3割以下だった道産広葉樹の利用率が、2023年には7割に上昇。

● 北海道産広葉樹利用促進研究会（2022年に発足）

- より広範な種類の道産材の利用に向け、樹種ごとの資源量や強度の把握、家具材として利用可能な樹種候補の選出などを行う。



2014



2023

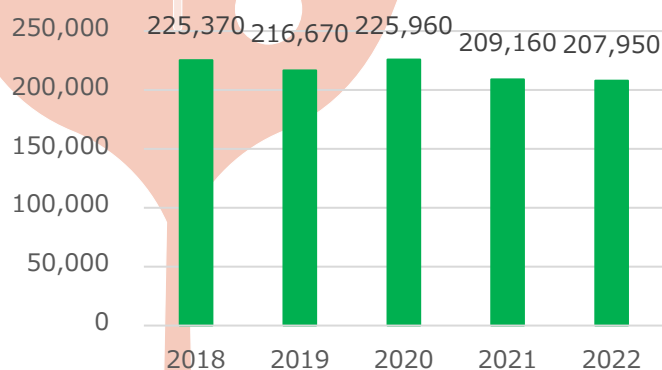
資料：旭川家具工業協同組合ウェブサイト

きのこ生産資材への利用動向

- きのこ生産資材である、しいたけ原木や菌床栽培用おが粉にナラ・クヌギ等の里山広葉樹が活用
- 近年、しいたけ原木生産の産出額は減少しているものの、栽培きのこ類生産の産出額や輸出額は横ばいで推移しており、引き続き安定的な需要が期待
- 一方で、広葉樹伐採手の不足等により、原木やおが粉不足との声も

栽培きのこ類生産の産出額

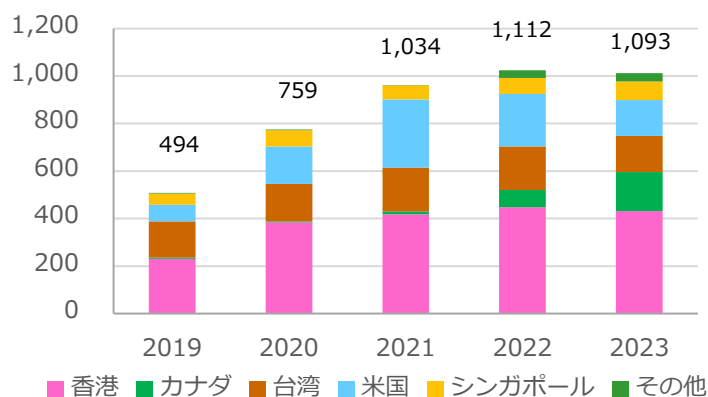
(百万円)



資料：農林水産省「林業産出額」

きのこの輸出先国別輸出額

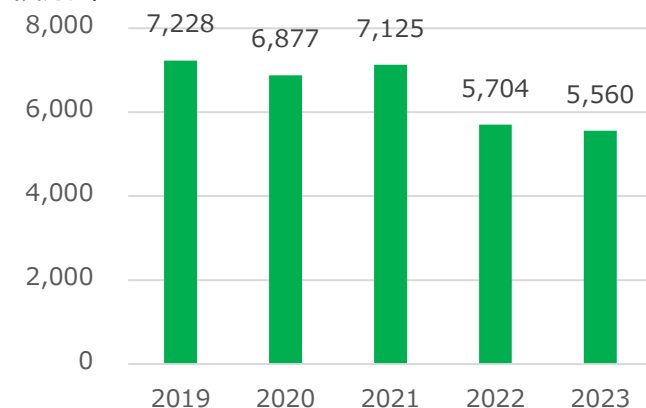
(百万円)



資料：財務省「貿易統計」

しいたけ原木生産の産出額

(百万円)

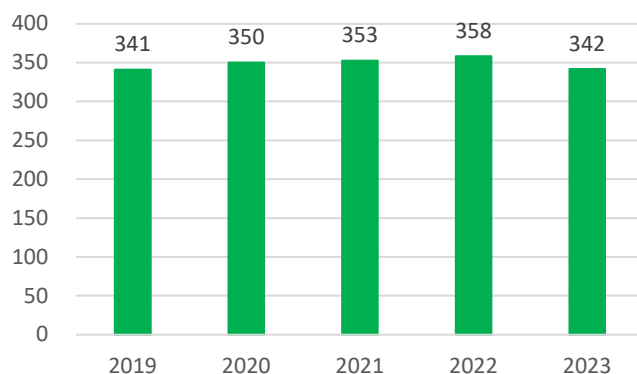


資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

※しいたけ原木伏込量と原木価格（なら、くぬぎの平均）から算出

菌床栽培きのこ用の おが粉利用量（試算）

(千㎡)



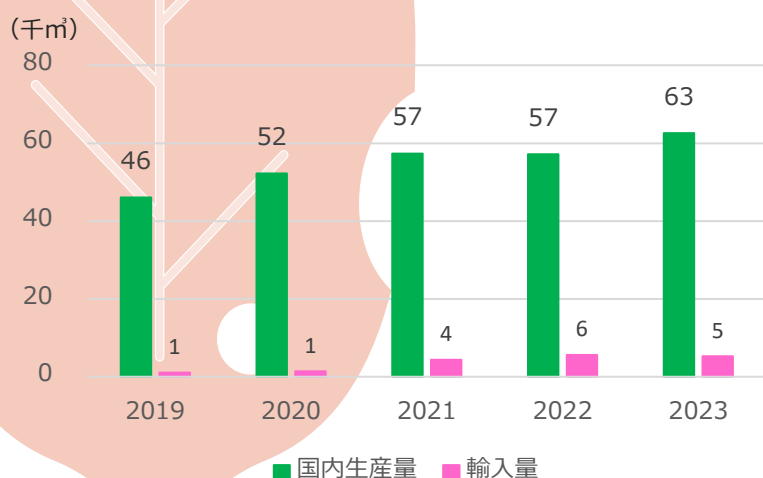
資料：農林水産省「特用林産基礎資料」、
2022年度版きのこ年鑑

※丸太換算。主に広葉樹を利用する菌床生しいたけ、
菌床なめこ、まいたけについて試算

薪炭への利用動向

- 薪炭には、ナラ、カシ、クヌギ、ウバメガシ等が利用
- 薪や木炭の利用は、飲食店関連等で増加傾向にあり、引き続き需要が期待

薪の生産量・輸入量

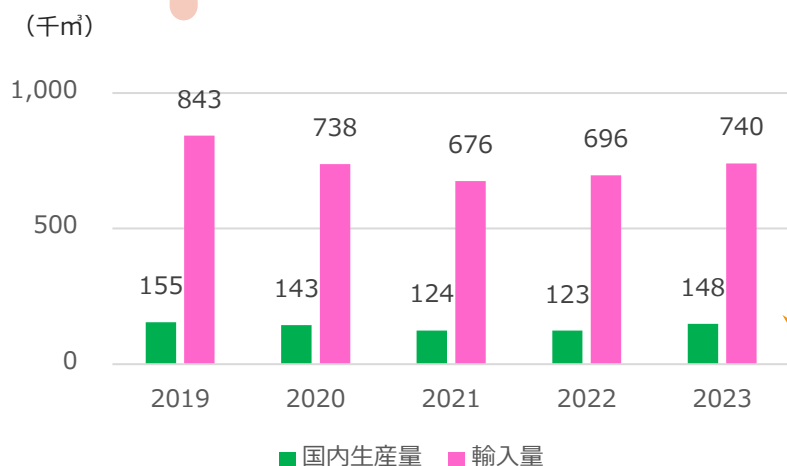


資料：農林水産省「特用林産基礎資料」、財務省「貿易統計」



ピザ窯やパン窯用等としての利用、薪ストーブの販売台数の増加等を背景に増加傾向

木炭の生産量・輸入量



資料：農林水産省「特用林産基礎資料」、財務省「貿易統計」

※生産量には黒炭、白炭、粉炭、オガ炭を含む。

輸入量には粉炭・粒炭、その他木炭（白炭、黒炭等）、オガ炭を含む。
丸太換算。



紀州備長炭炭窯



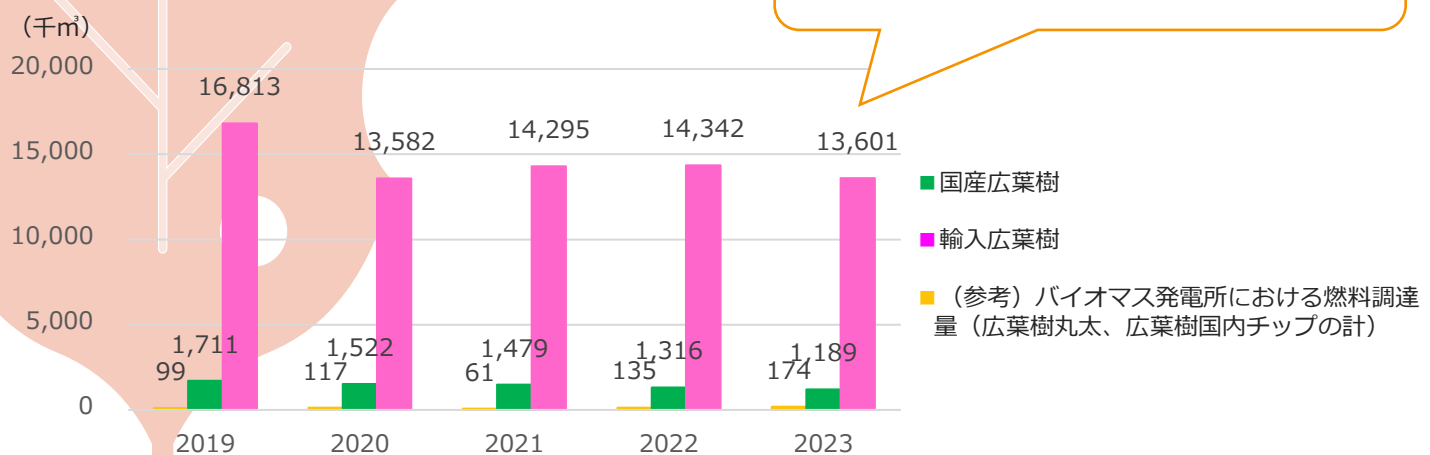
黒炭

飲食店、茶道等で根強い需要があり、災害時の燃料としても期待。バイオ炭の農地施用にも需要の高まり

チップ及び木質ペレットの利用動向

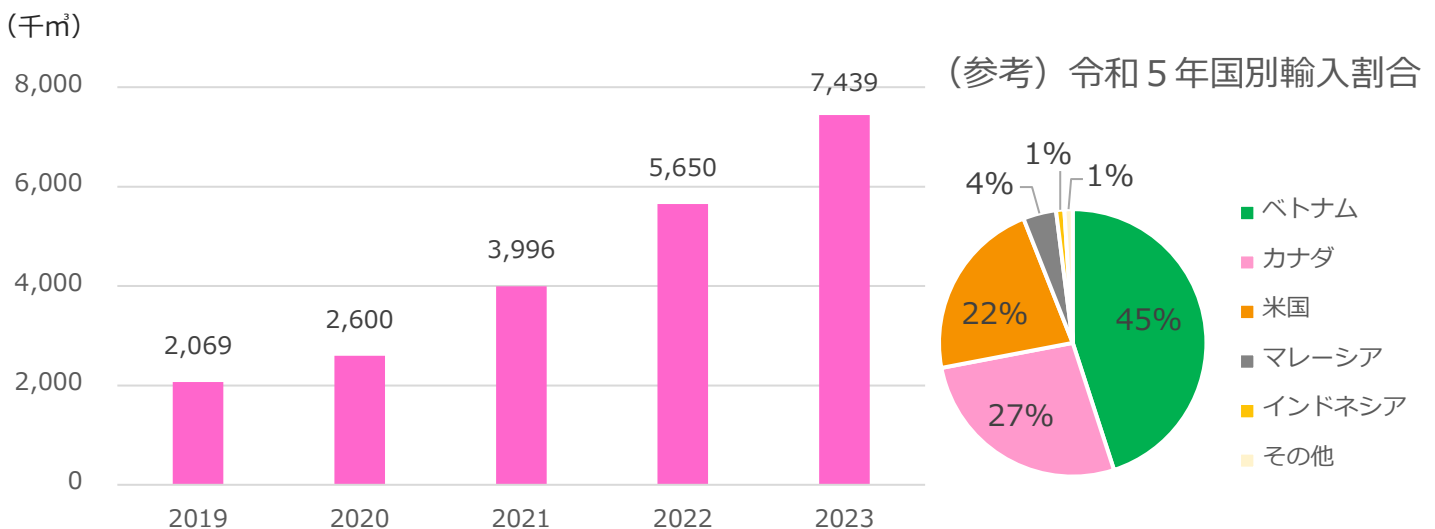
- パルプ用チップや木質ペレットは、大量に消費する製紙工場や発電所が主要港湾近郊に立地しており、輸入材の利用割合が高い
- このため、引き続き輸入材に依存する割合が高いものと推測

パルプ用広葉樹チップの消費量



資料：経済産業省「生産動態統計年報」
国産燃料材の需給動向調査（（一社）日本木質バイオマスエネルギー協会）
※年度調査かつ悉皆調査でないことに留意

木質ペレットの輸入量 ※針葉樹も含む



※丸太換算
資料：財務省貿易統計

国産広葉樹の生産・流通拡大に向けて

現状	期待と課題
・ 広葉樹需要の多くは依然として<u>輸入に依存</u> ・ 近年、ウッドショックや為替変動などにより<u>輸入広葉樹の需給がひっ迫</u> ・ 国産広葉樹の多くは<u>チップに活用され、製品利用は僅か</u> ・ <u>木製家具・床材用途</u>は取引価格が高く、<u>産業としても堅調</u> ・ 広葉樹を扱う市場や製材工場は一部の地域に偏在 ・ きのこや薪・炭、チップなどの広葉樹需要は堅調 ・ チップについては、輸入への依存が高い一方、国産広葉樹においても7割以上がチップ用途	・ 国産広葉樹への転換は、里山林の再生はもちろんのこと、<u>海外違法伐採対策や、木材輸送に係る温室効果ガス(GHG)の低減にも寄与</u> ・ 家具産業を中心に、<u>国産広葉樹の需要は高まっている一方で、安定的な供給に課題も</u> ・ 里山広葉樹について、<u>家具・床材等の高付加価値材としての利用拡大が期待</u> ・ <u>かつては使われてこなかった樹種・径級、節あり、虫害材など</u>を利用する動き ・ 地域レベルで、<u>需要・供給サイドの連携した取組が行われはじめている</u> ・ 里山広葉樹の資源を有効活用するためには、<u>特用林産やチップの需要についても、欠かせない要素</u>

CONTENTS



0 1

里山広葉樹の
特徴とその変遷



0 2

広葉樹の需要
動向



0 3

里山広葉樹林
の新たな価値
創造と利活用
を通じた再生
に向けて

里山広葉樹林の生態系としての価値

- 里山広葉樹林（二次林）は、人間の暮らしに必要な資源を供給する過程で、人間による利用・管理に伴う攪乱を受けることにより林内が比較的明るく保たれ、多様な生物が生育・生息する特有の生態系を形成してきた。
- 代表的な生物種の例：
 - 広葉樹（コナラ、ミズナラ、クヌギ、カシ等）
 - 樹液に集まる昆虫（カブトムシ、クワガタムシ等の甲虫類、オオムラサキ等の蝶類 等）
 - 先駆性の植物（ヤマブキ、キイチゴ等）
 - 春植物（カタクリ、フクジュソウ、ニリンソウ等）



アンダーユースによる生物多様性の危機

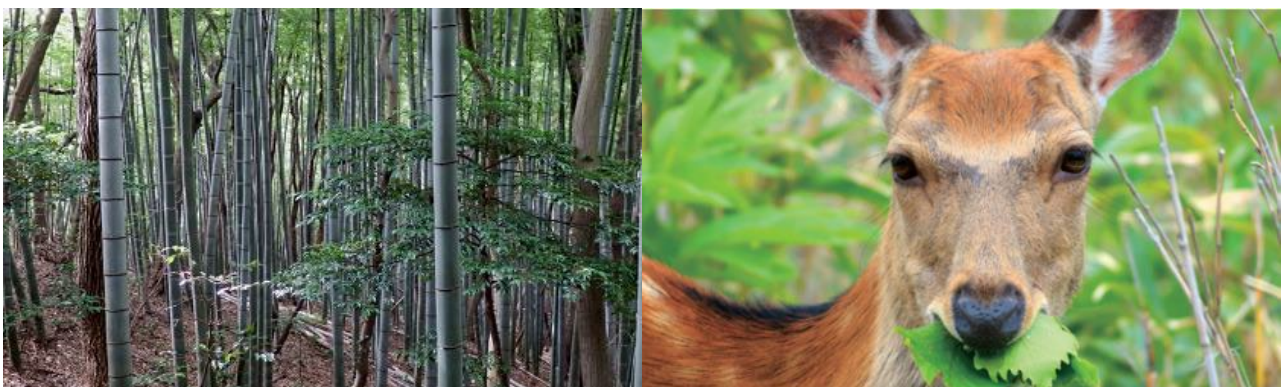
- 日本の生物多様性及び生態系サービスは、過去50年間減少し続けている。
- 里山広葉樹林では、利用・管理の縮小に伴い、生物多様性が失われ（生物多様性の「第2の危機」）、生態系による負の影響（ディスサービス）が顕在化する傾向にある。
 - 高齢化した樹木やタケ・ササ類が密生した陰樹的な二次林への変化
 - カシノナガキクイムシが媒介するナラ枯れの被害拡大
 - 野生鳥獣との軋轢（ニホンジカによる食害、クマ類による人的被害等）

生物多様性 : 生態系、種、遺伝子の多様性

生態系サービス : 生物多様性を基盤とする生態系から得られる様々な恵み

日本の生物多様性が直面する4つの危機 :

- 第1の危機（開発など人間活動による危機）
- **第2の危機（自然に対する働きかけの縮小による危機）**
- 第3の危機（人間により持ち込まれたものによる危機）
- 第4の危機（地球環境の変化による危機）



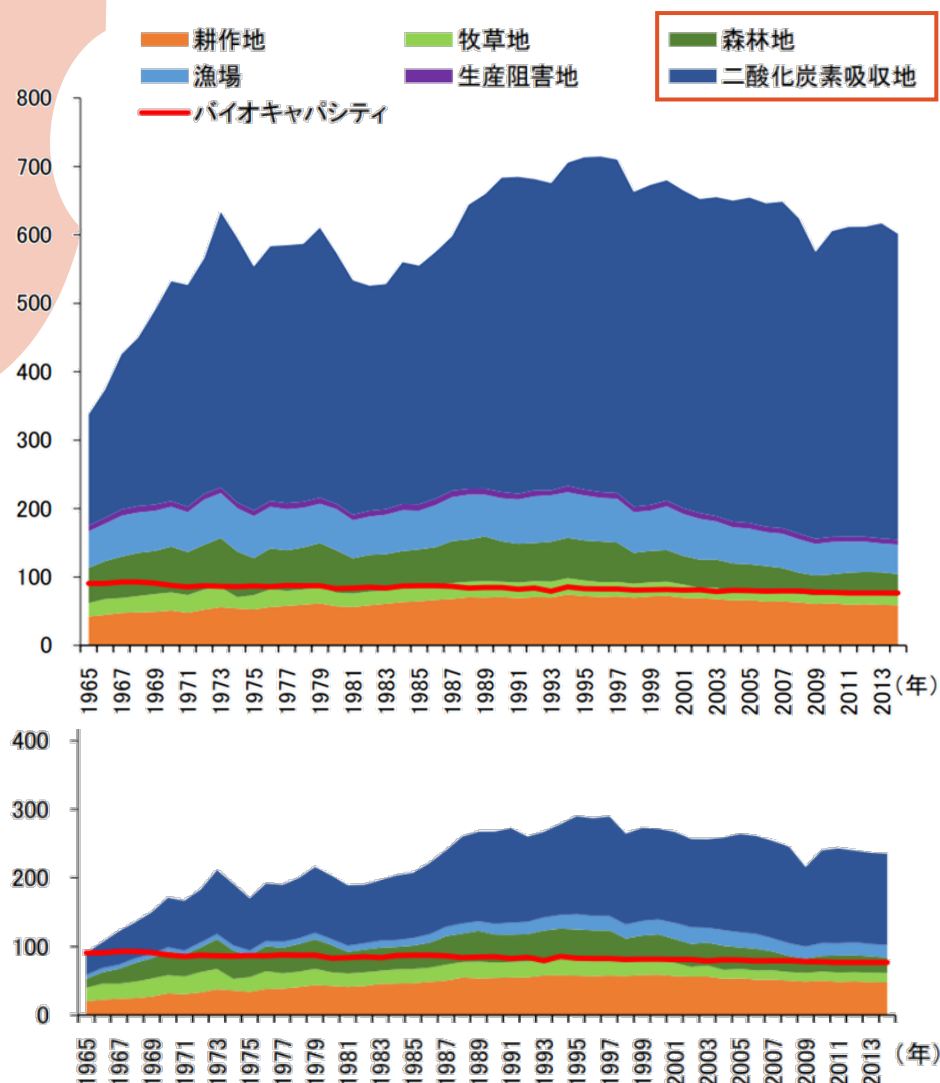
海外依存による影響

- 日本の広葉樹需要の大半は輸入材に依存しており、海外の森林生態系に負荷を与えている。
- 海外依存は、輸送に伴う二酸化炭素の排出量を増加させているおそれもある。

<日本のエコロジカル・フットプリント>

エコロジカル・フットプリント
(百万gha)

エコロジカル・フットプリントのうち海外からの輸入分
(百万gha)

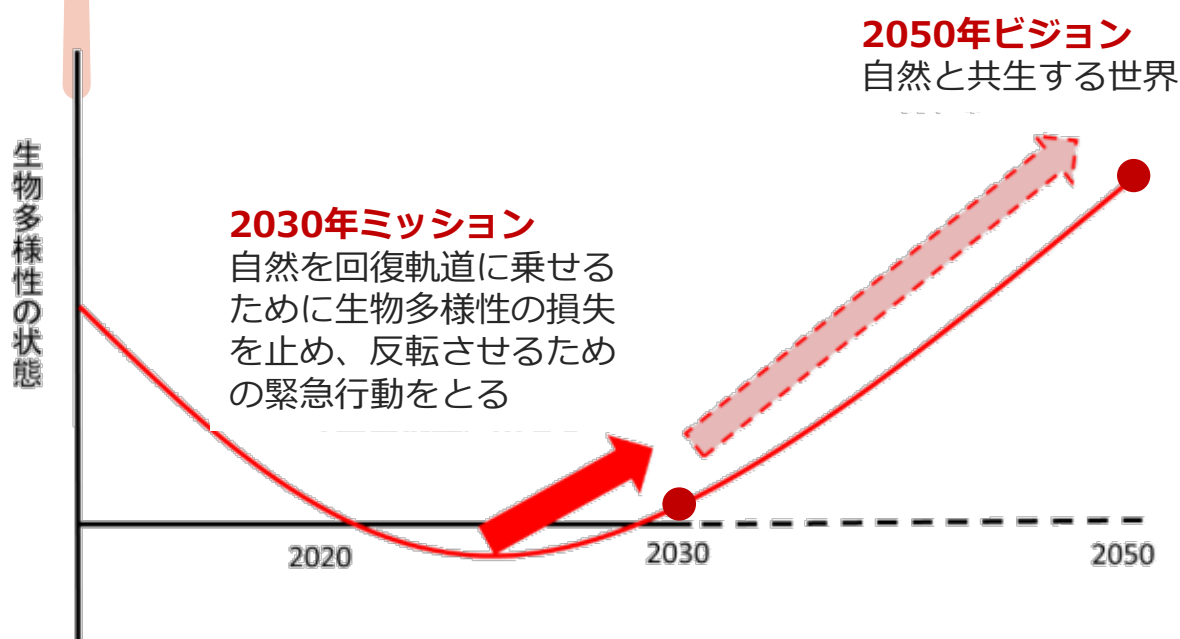


- **エコロジカル・フットプリント**：消費に係る生態系への負荷を表す指標であり、土地面積に換算して計算したもの
- **バイオキャパシティ**：自国の持続可能な生産可能量を土地面積に換算して計算したもの

2030年ネイチャーポジティブに向けて

- 2022年12月の生物多様性条約第15回締約国会議において、生物多様性保全の新たな国際目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択された。
 - 2050年ビジョン：「自然と共生する世界」
 - 2030年ミッション：「生物多様性の損失を止め反転させる」いわゆる「ネイチャーポジティブ」（自然再興）の実現
- 日本でも2023年3月、「2030年ネイチャーポジティブ」を目標に掲げる「生物多様性国家戦略2023-2030」を策定した。
- 民間企業では、「自然関連財務情報開示タスクフォース（TNFD）」の提言に基づく自然関連のリスクと機会に関する情報開示の動きが広がっている。

＜ネイチャーポジティブのイメージ＞

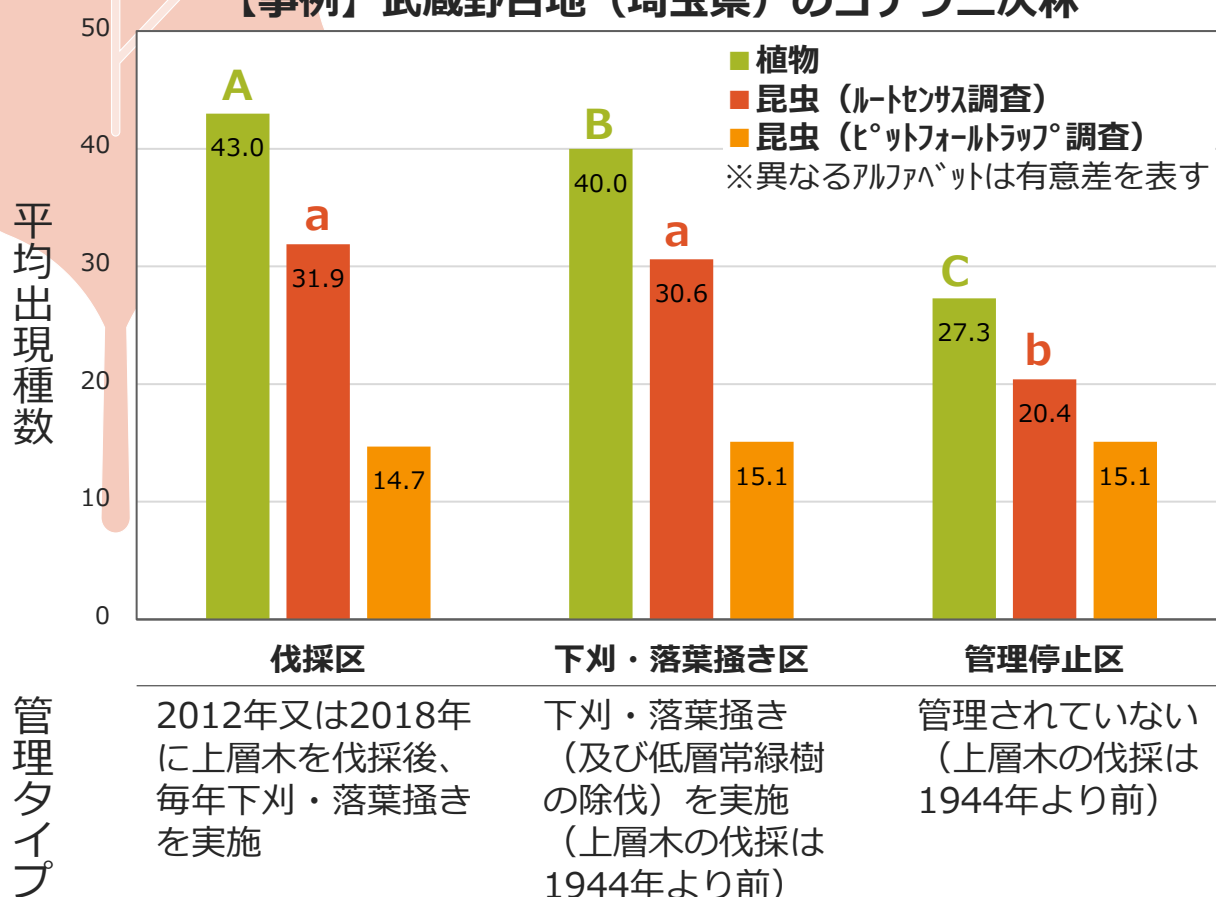


積極的な管理の必要性

- 里山広葉樹林の生態系と生物多様性は、人間からの働きかけによって生まれ、人間と自然との相互関係の下に育まれてきた。
- アンダーユースにより生物多様性が損なわれている里山広葉樹林において、生物多様性を保全していくためには、積極的に人の手を入れて管理していくことが必要となる。

＜里山林の管理による植物と昆虫の保全効果＞

【事例】武蔵野台地（埼玉県）のコナラ二次林

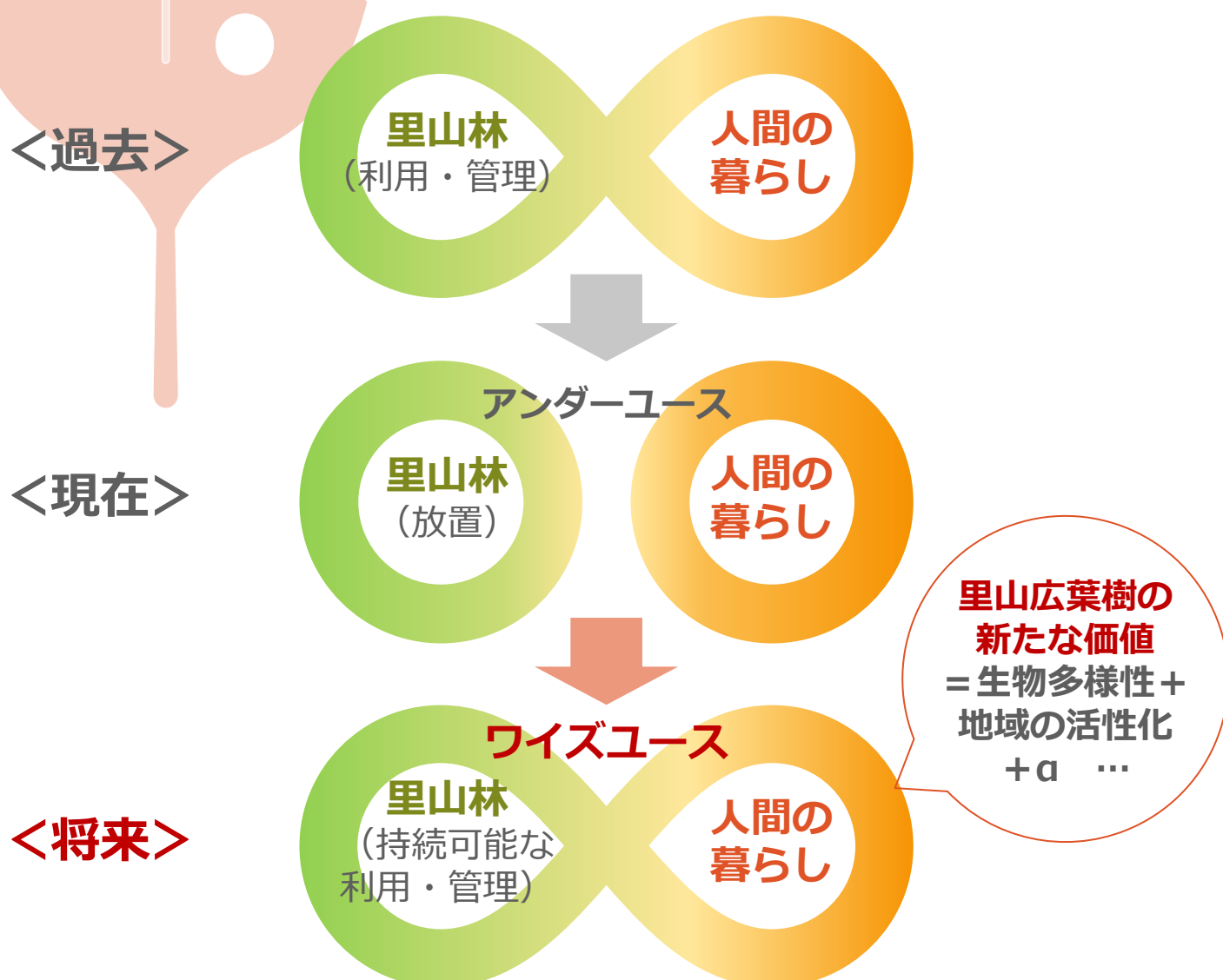


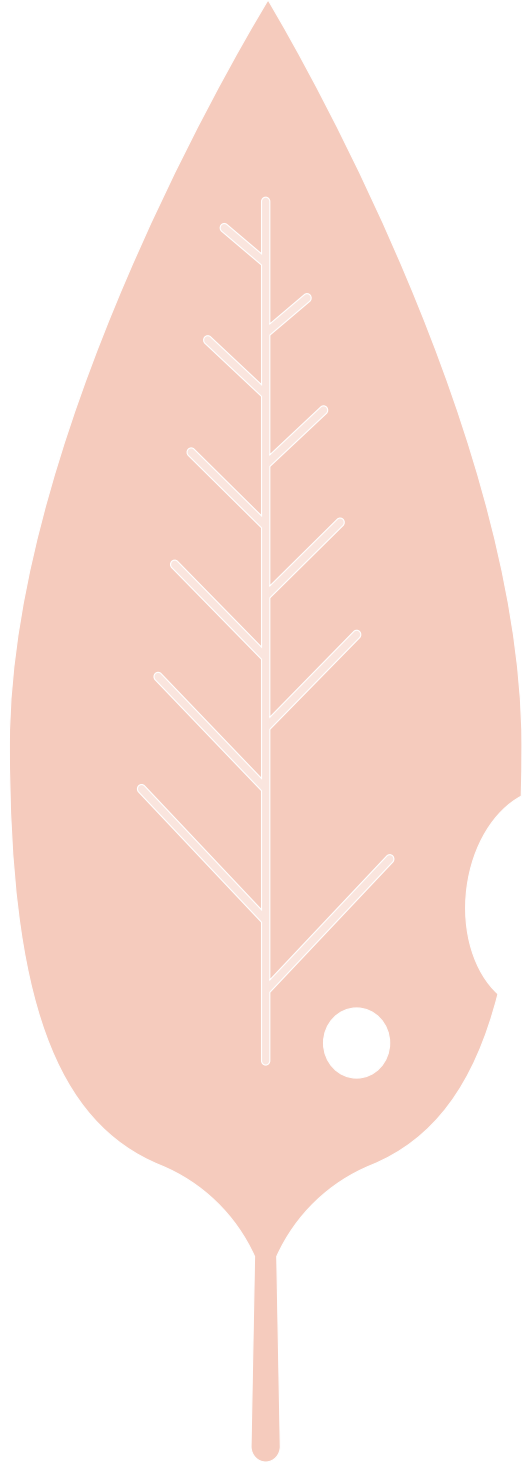
植物については、伐採や下刈・落葉掻きにより、コナラ二次林に典型的な草本や埼玉県レッドデータブック掲載種を含む機能群の種数が多くなった

里山広葉樹の 新たな価値創造と利活用を通じた再生に向けて

- かつての里山広葉樹林は、広葉樹資源の供給を通じて人間の暮らしにおいて重要な役割を担っていたが、現在この価値が失われたことがアンダーユースにつながっている。
- 里山広葉樹林を再生していくためには、そこから供給される広葉樹の利活用に新たな価値を生み出し、森林の持続可能な利用・管理につなげていくことが重要。

•このような里山広葉樹の新たな価値創造 と利活用を通じた再生のあり方とは？



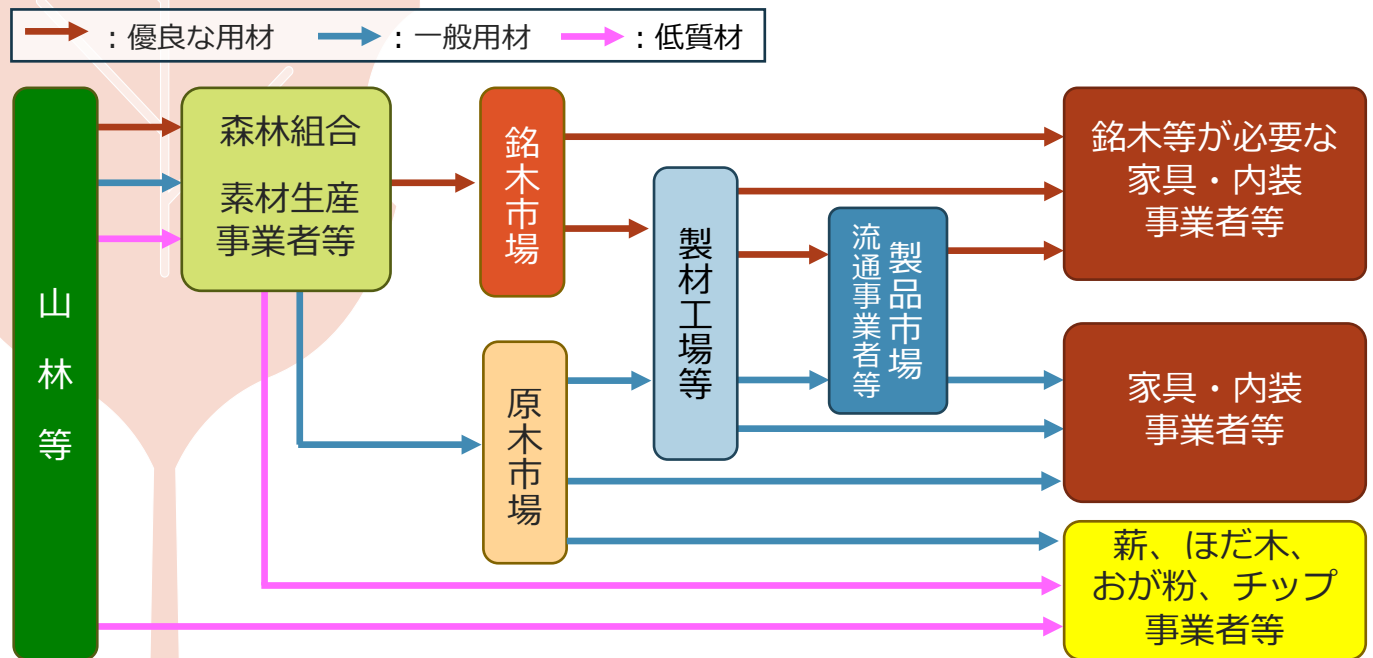


參考資料

国産広葉樹材の流通拡大への期待

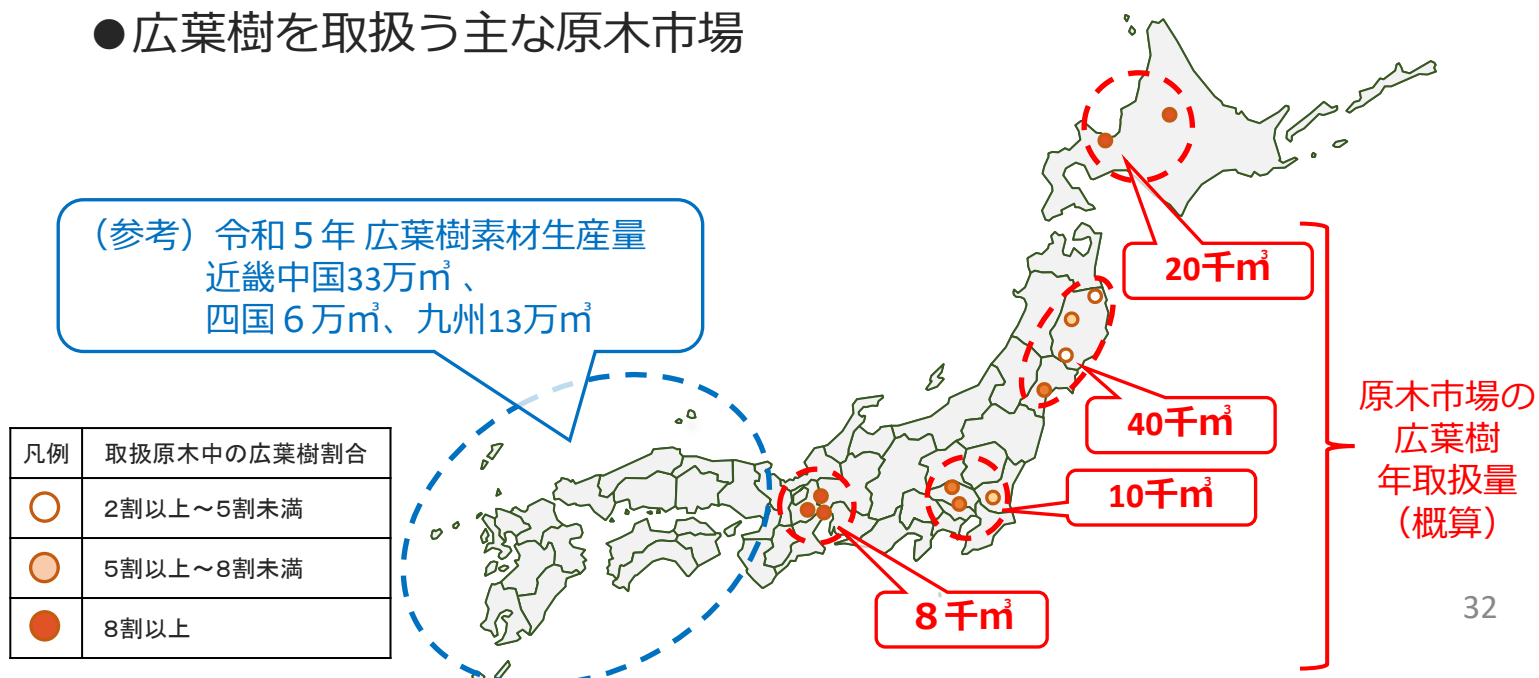
- ・良質な外材の輸入減少と価格上昇により広葉樹材需給がひっ迫
- ・国産広葉樹材に対する新たなニーズが高まり、用材としてかつて利用されなかった径級・樹種や、節あり・虫害木の利用も
- ・薪、チップ等の底堅い需要への安定供給とともに、家具・内装材等の高付加価値材への供給拡大が期待

● 国産広葉樹材の主な流通経路



資料：森林総合研究所 青井秀樹氏作成資料を加工

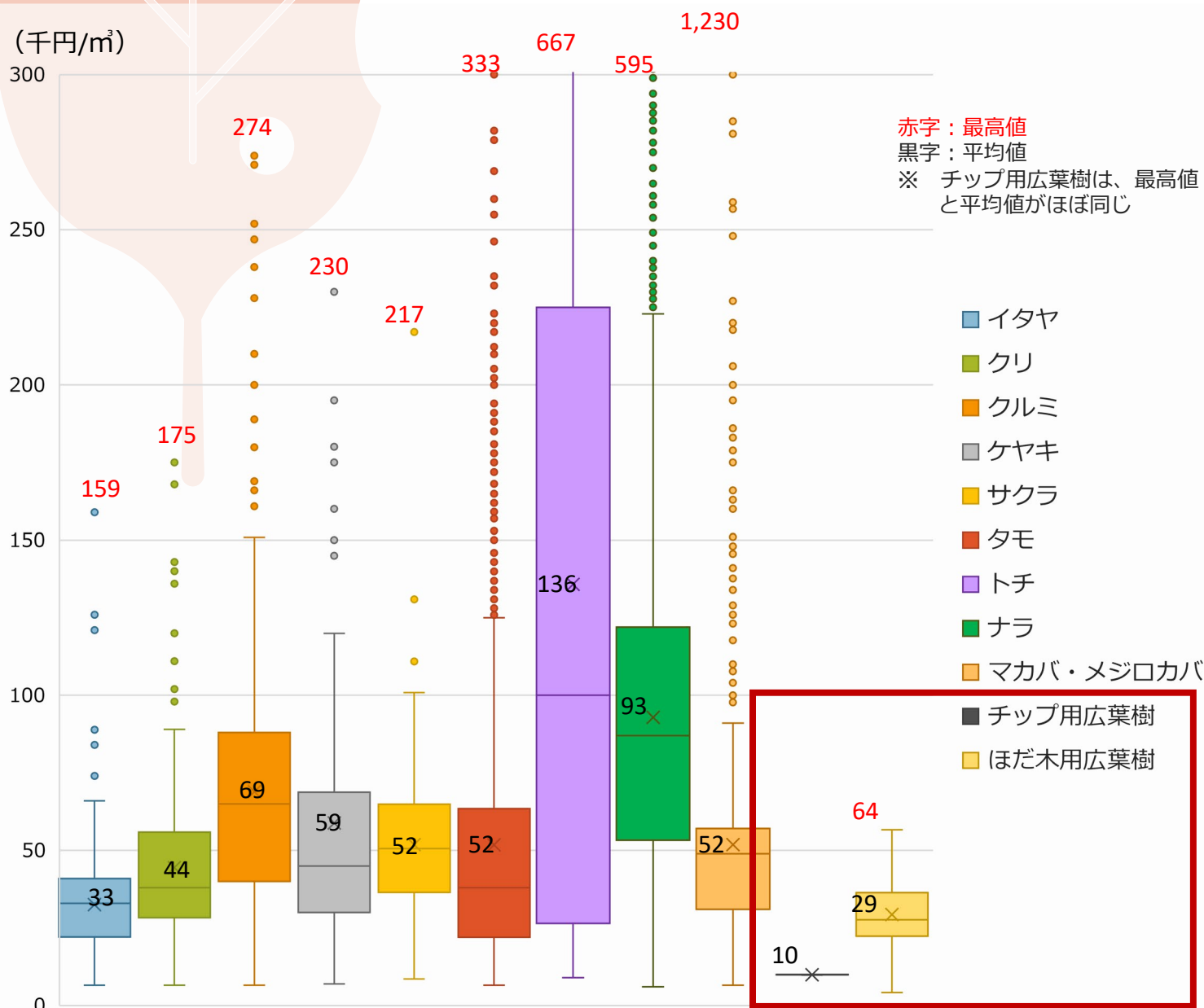
● 広葉樹を取扱う主な原木市場



国産広葉樹の丸太価格（用途、樹種別）

- 用途によって、価格レンジはかなり異なる
- 同じ樹種でも、伐採時期や径級等によって用途は変わる
- 一般的に、広葉樹は夏季、含水率が高まり、材色変化、材質低下等が発生することが多く、価格は低くなる
- 家具・床材等の高付加価値材への国産広葉樹の供給拡大に期待

● 用途、樹種ごとの国産広葉樹の丸太価格



※ 樹種によっては、空アリを含む場合がある

資料：林野庁「木材統計」、「特用林産基礎資料」、旭川林産協同組合「北海道銘木市」、奈良県森林技術センター「広葉樹利用に関する調査報告」より林野庁作成

広葉樹の丸太価格（径級による差）

- 同じ樹種でも用途によって必要な径級が異なり、価格も大きく異なる
- 製品用途の割合を増やしながらか、カスケード利用することが大事

● 用途ごとの必要径級及び樹種別丸太価格（概算）

用途	必要径級（cm）		丸太単価（円/m ³ ）				
			トチ	ナラ	クリ	サクラ	クヌギ
チップ材	－		9,500※ ¹				
しいたけ原木	6 ～ 14	小径材	－	しいたけ 原木 30,081 （346円 ／本）※ ²	－	－	しいたけ 原木 27,843 （368円 ／本）※ ²
床材、壁材、集成 加工材、木工品、 玩具	14 ～ 30	中径材	3～5万	－	3～4万	4～5万	－
内装材、建具、家 具、板材	30 ～	大径材	－	ミズナラ 10万	5～8万	5～8万	－
つき板（板目）	40～		－	ミズナラ 40～50万	15～20万	20万以上	－
つき板（柃目）	60～		－				－
天板	70～		杢なし 15～30万 杢あり 30～100万	－	－	－	－

※ 1：農林水産省「令和 3 年木材需給報告書」

※ 2：農林水産省「令和 3 年度特用林産物生産統計調査」

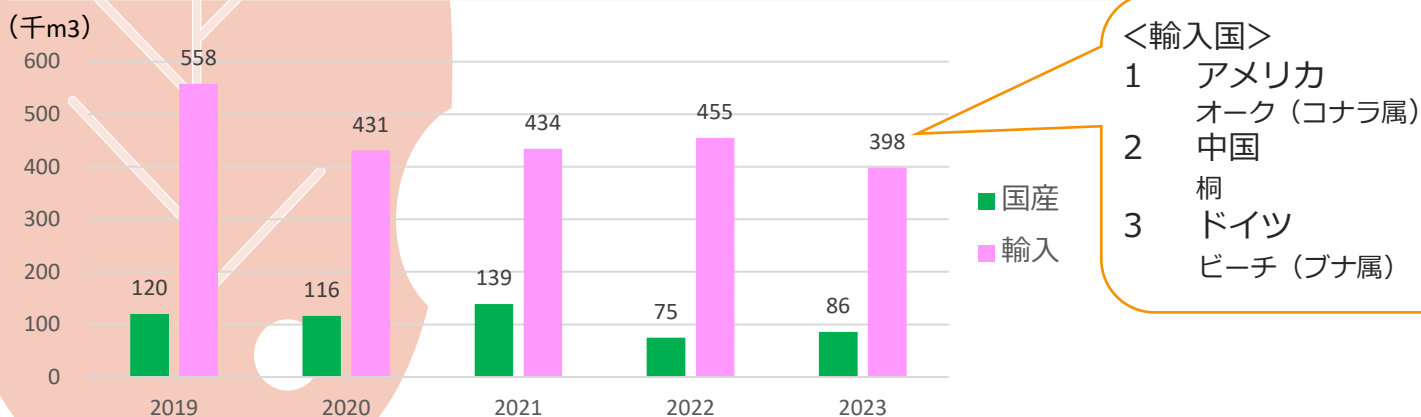
※ 1、※ 2 以外は令和 4 年 1 月岐阜県の市場関係者からの聞き取り結果

資料：奈良県森林技術センター「広葉樹利用に関する調査報告」より

製材・合板用広葉樹の動向

● 製材用広葉樹の利用量

- 全体の需要量は約48万m3（製品ベースで約20万m3程度）※であり、これらが国内の家具・床材等の生産工場で活用
- 国内の製材工場が扱う国産広葉樹材は9万m3に留まる

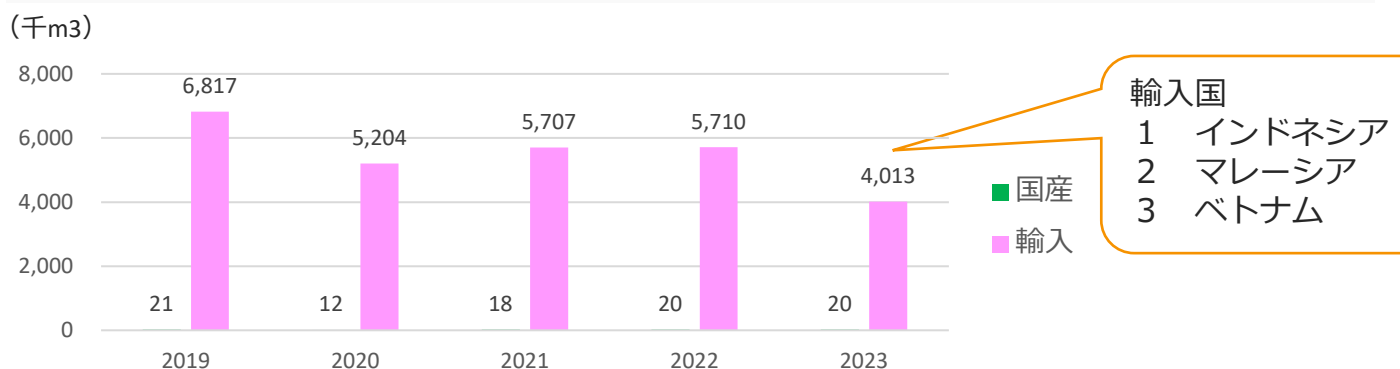


国産：製材工場の国産広葉樹入荷量、輸入：製材品（針葉樹以外）の輸入量（丸太換算）

※このほか、輸入広葉樹丸太の入荷量は約7万m3

● 合単板用広葉樹の利用量

- 合単板用輸入広葉樹約400万m3のうち、約5割はコンクリート型枠などに使われるラワンなどの南洋材
- 米国やヨーロッパからは単板（突板）を輸入
- 国内の合単板工場が扱う国産広葉樹材は2万m3に留まる（突板や家具・内装用）

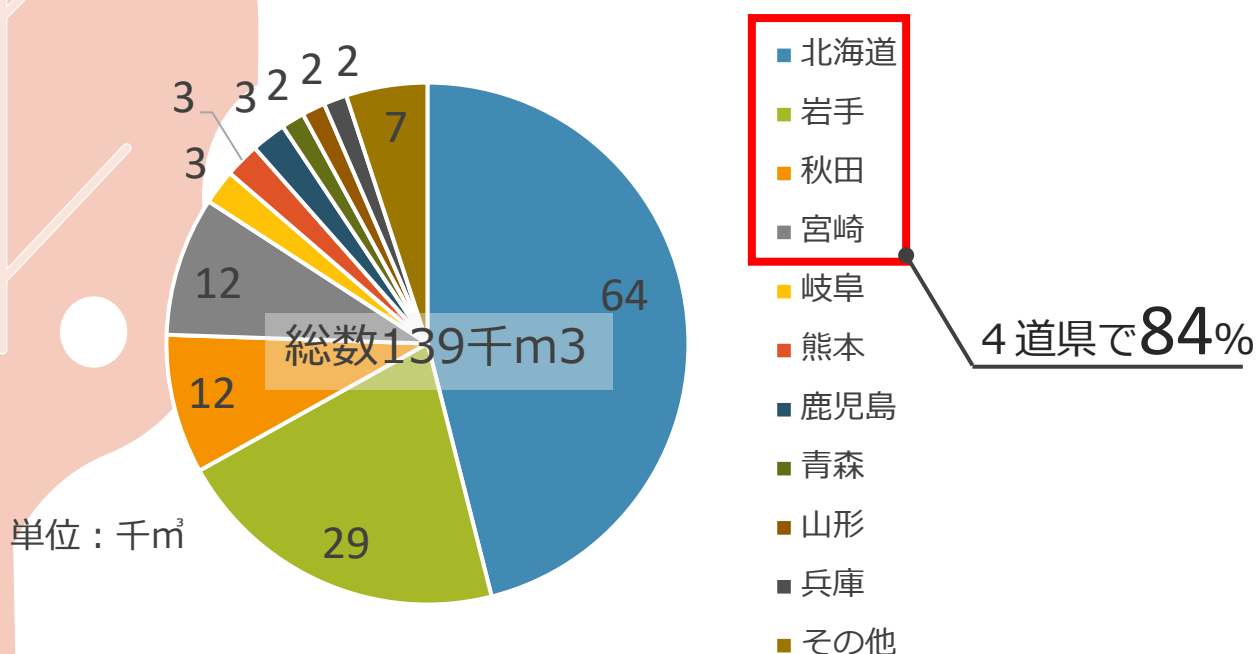


国産：合単板工場の国産広葉樹入荷量、輸入：合単板（針葉樹以外）の輸入量（丸太換算）

製材工場の国産広葉樹の取扱量

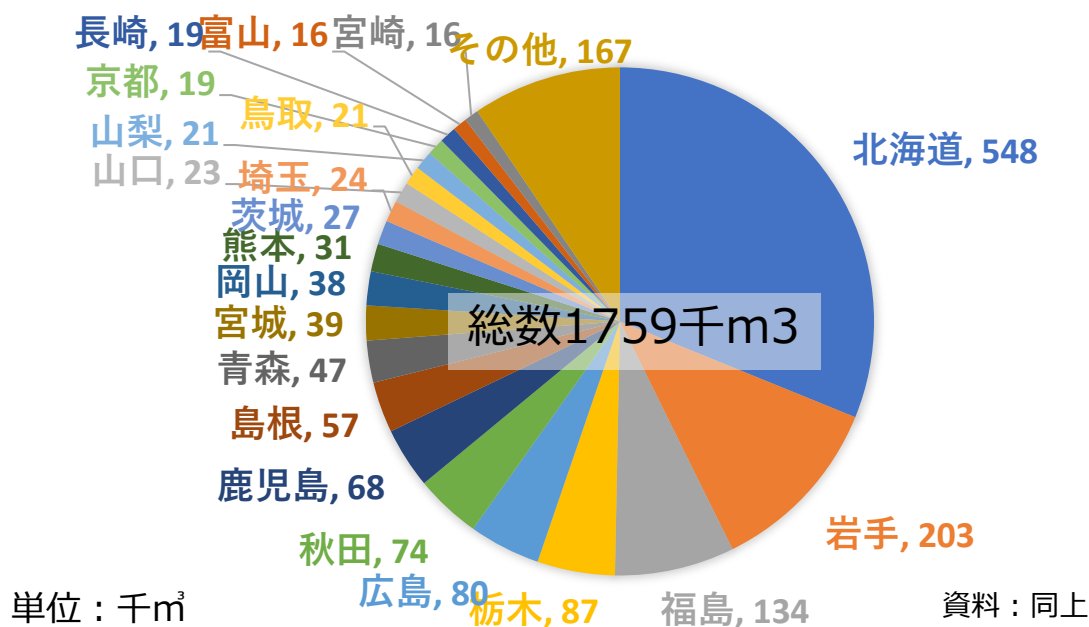
- 国産広葉樹を扱う製材工場を広葉樹入荷量ベースで見ると一部の道県に偏在（上位4道県で8割以上）
- 一方で、合板・チップも入れた国産広葉樹全体で見ると全国流通しており、各県に利用のポテンシャルはある

● 製材工場の国産広葉樹入荷量 都道府県別（2021年）



資料：農林水産省「木材統計調査」から作成。なお、2023、2022年は当調査で広葉樹の製材工場入荷量が公表されていない都道府県が多いため、2021年の調査結果を活用。

（参考）製材・合板・チップ工場の国産広葉樹入荷量（2021年）



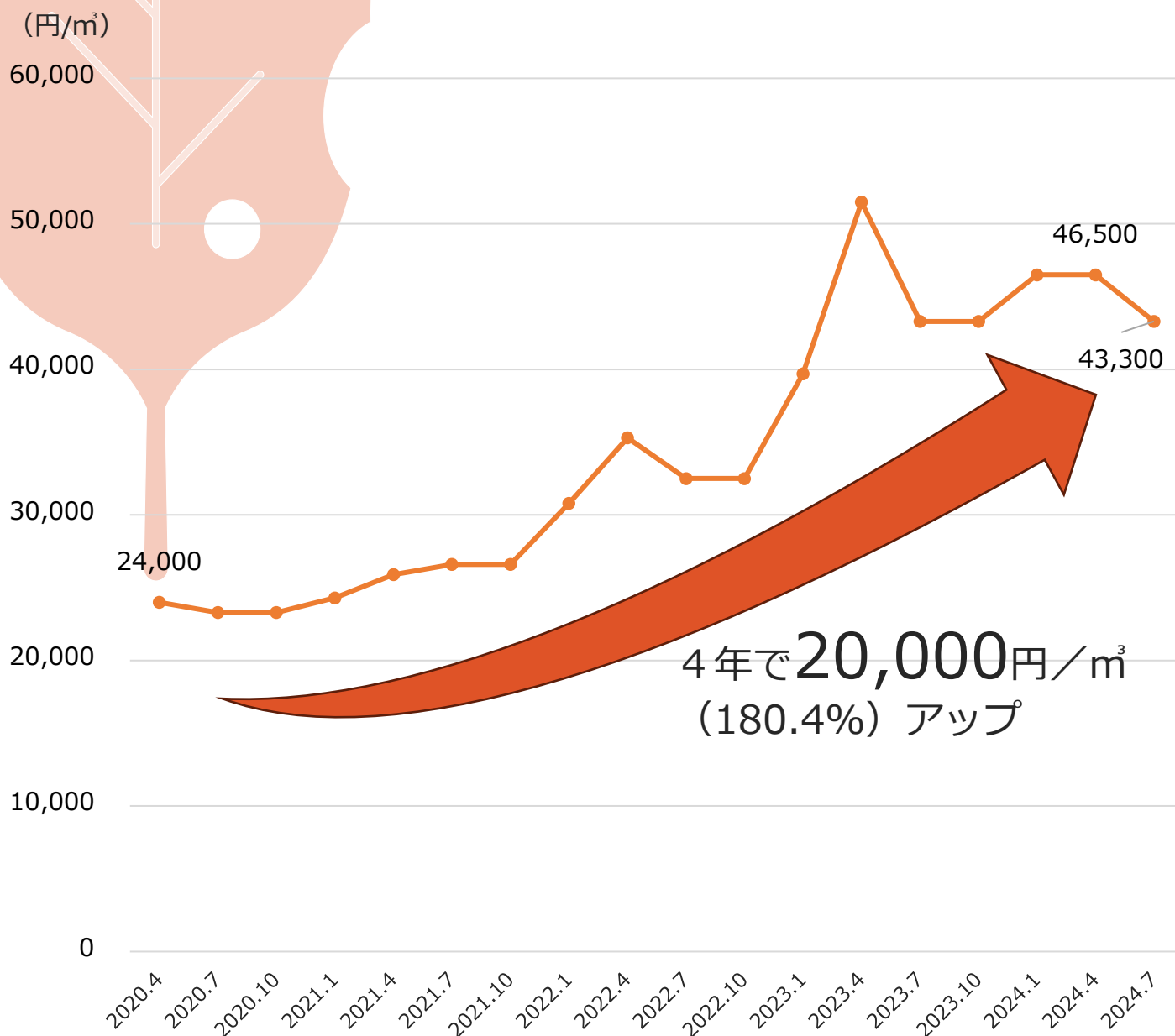
国産広葉樹の丸太価格の動向

【旭川含む上川地域】

- 輸入広葉樹の需給ひっ迫の影響もあり、国産広葉樹の価格も大きく上昇傾向

● 北海道産広葉樹の丸太価格

(北海道上川地域のナラ（径30～38cm、2.4m上）の工場着価格)



資料：北海道木材市況調査

国内での家具製造が好循環をつくる (～旭川家具の事例を背景に～)

● 広葉樹製品利用（家具等）の全体イメージ

(丸太換算の利用量)

国産材		輸入材	
広葉樹丸太		広葉樹の 製材・合単板輸入	木製家具輸入 (針葉樹含む)
10.6 万 m3	7.0 万 m3	39.8万m3 (製材) + a (合単板) ※合単板（コンパネ除く）は未集計	推定450万m3 (輸入木製家具の推定木材量) ※針葉樹も含む

素材生産
原木市場

製材工場
合単板
工場

家具
メーカー
家具工房

【輸入】
海外で
1次
加工
(製材・
合単板)

【輸入】
海外で家具製造まで

国内で
家具製造

小売・販売店、消費者へ